

興聖寺本『統高僧伝』卷四玄奘伝

——翻刻と校訂——

吉 村 誠

唐の道宣（五九六―六六七）が著した『統高僧伝』三〇卷は、卷一の自序に「始岨梁之初運、終唐貞觀十有九年、一百四十四載。包括岳瀆、歴訪華夷。正傳三百四十人。附見一百六十人」とあるように、梁の天監元年（五〇二）年から唐の貞觀一九年（六四五）までの一四四年間に活躍した高僧について、本伝三四〇人、附見一六〇人の伝記を収録しているという。しかし、『大正新脩大藏經』卷五〇所収の『統高僧伝』三〇卷には、同書が完成したという貞觀一九年以後の記事や、道宣の没した乾封二年（六六七）以後の記事が存在し、本伝四八五人、附見二一〇人以上の伝記が収録されている。このことから、『統高僧伝』は数次にわたって増補されたと考えられ、道宣撰『後集統高僧伝』一〇卷（散逸）との関係や、刊本諸本の比較、写本諸本の比較などによる文献批判が行われている¹⁾。

『統高僧伝』の古写本には興聖寺本・金剛寺本・七寺本などがあり、それぞれの保存状況については国際仏教学大学院

大学の日本古写経データベースで公表されている (<http://koshakyō-database.ics.ac.jp/index.seam>)。これらの古写本は、『大正新脩大藏經』の底本である高麗新雕本や、その校本である宋本（思溪藏）・元本（普寧藏）・明本（嘉興藏）・宮本（旧宋本、福州本）などの刊本よりも古い形態を持つものであり、『統高僧伝』の増広過程を考えるうえで貴重な資料となっている。このうち興聖寺本は、全巻がそろい、良好な状態を保っている貴重な写本である。一九七九年度の印度学仏教学会の学術大会で花園大学の緒方香州氏によってその存在が公表され、同大学のホームページで「『統高僧伝』興聖寺本について・基礎資料対照表」 (http://iriz.hanazono.ac.jp/framek_room_12b.html) が公開されている。

興聖寺本『統高僧伝』の翻刻は、卷四のみが、藤善眞澄氏に一九七九年に一部、二〇〇二年に全部公表されている。卷四が注目されたのは、興聖寺本と現行諸本の間に顕著な違いがあるからである。現行諸本は玄奘伝・那提伝・論（訳経篇）

で構成されているが、興聖寺本には那提伝がない。また、玄奘伝も貞観二三年の記事で終了し、記事の配列や内容が現行諸本と異なるところがある。このことから、藤善氏は両者の校合を通じて『統高僧伝』の成立年代を推定され、興聖寺本『統高僧伝』巻四の翻刻を公表されたのである。

筆者は、平成六―七年に玄奘の伝記である『大唐大慈恩寺三藏法師』一〇巻の成立について研究したさい、藤善氏から興聖寺本『統高僧伝』巻四の複写をご恵贈いただいた。⁽³⁾また、平成一四―一八年に花園大学国際禅学研究機構の研究事業に参加して、興聖寺本『統高僧伝』を実見する機会を得、巻一から巻四までの訳経篇の翻刻研究を行った。その結果、藤善氏の巻四の翻刻には不備があることが明らかとなったため、ここに興聖寺本『統高僧伝』巻四を新たに翻刻し、大正蔵本と校合して校訂本文を作成することにした。⁽⁴⁾近年、興聖寺本よりも金剛寺本のほうが古い形態の写本であることが明らかとなったが、本稿では興聖寺本そのものの翻刻と校訂に努め、金剛寺本との校合は他日を期したい。⁽⁶⁾

興聖寺住職の長門玄晃老師には経蔵を開扉していただき、貴重な蔵書を数日にわたって拝見させていただいた。ここに深い感謝の意を表したい。また、翻刻にあたっては駒澤大学専任講師の山口弘江氏と、同大学院修士課程の伊東崇啓氏・奥山いをり氏の協力を得た。

なお、本稿は駒澤大学の平成二四年度特別研究助成の成果の一部である。

註

- (1) 『統高僧伝』と『後集統高僧伝』の関係については、前川隆司「道宣の後集統高僧伝に就いて」（『龍谷史壇』四六、一九六〇年）、藤善眞澄「道宣の入蜀と『後集統高僧伝』」（『関西大学文学論集』四二―一、一九九二年）参照。また、刊本および写本の諸本の比較研究については、藤善眞澄「統高僧伝」玄奘伝の成立―新発見の興聖寺本をめぐって―（『鷹陵史学』五、一九七九）、伊吹敦「統高僧伝」の増広に関する研究」（『東洋の思想と宗教』七、一九九〇年）、藤善眞澄「統高僧伝」管見―興聖寺本を中心に―（『道宣伝の研究』京都大学学術出版会、二〇〇二年）、Saitō Tatuya「Features of the Kōgō-jī version of the Further Biographies of Eminent Monks: With a Focus on the Biography of Xuanzang in the Fourth Fascicle」（『国際仏教学大学院大学研究紀要』一六、二〇一二年）、池麗梅「統高僧伝」研究序説―刊本大蔵経本を中心として―（『鶴見大学仏教文化研究所紀要』一八、二〇一三）参照。
- (2) 藤善前掲「統高僧伝」玄奘伝の成立―新発見の興聖寺本をめぐって―、および「道宣伝の研究」二〇二―二四頁参照。
- (3) 吉村誠「『大唐大慈恩寺三藏法師伝』の成立について」（『仏教

学』三七、一九九五）参照。

(4) 訓読・注釈については、大正蔵本の国訳である吉村誠・山口弘江訳『新国訳大蔵経 続高僧伝Ⅰ』（大蔵出版、二〇〇二年）参照。

(5) Saio 前掲論文参照。

(6) 興聖寺本の影印は、『日本古写経善本叢刊第八輯』（国際仏教学大学院大学日本古写経研究所、二〇一四年二月刊行予定）に掲載される。同書には、『続高僧伝』巻四の金剛寺本・七寺本・興聖寺本の影印、金剛寺本の翻刻および七寺本・興聖寺本との対校が含まれる予定である。

凡例

《翻刻》

- 一、写本の原文に記された文字を、できるかぎり忠実に翻刻した。
- 一、一般に使用されない異体字は、該当する正字に置き換えた。
- 一、判読できない文字は■で示した。
- 一、割注は「」で示した。
- 一、写本の巻・丁・行を、01-001のように示した。
- 一、該当する『大正新脩大蔵経』第五〇巻の頁・段・行を、**「T446c02」**のように補った。

興聖寺本『続高僧伝』巻四玄奘伝（吉村）

《校訂》

一、翻刻した本文に句読点を附し、適宜改行した。また、標題を「」で附した。

一、原則として正字に統一した。写本の原文で略字や異体字が使用されている場合も、これを正字に置き換えた。

例 「无」→「無」、「廿」→「二十」

一、『大正新脩大蔵経』の本文（大正）および校注（宋本・元本・明本・宮本）との異同がある場合、これを注記した。

一、『大正新脩大蔵経』との異同がある場合、写本の原文のまま意味が通じるものは、原則として原文を採用した。

一、明らかに誤字・脱字と思われるものは、これを注記して訂正した。

- 一、脱文と思われる字句は「」で補った。
- 一、割注は「」で示した。
- 一、写本の巻・丁を、01-001のように補った。
- 一、該当する『大正新脩大蔵経』第五〇巻の頁・段・行を、**「T446c02」**のように補った。

《翻刻》

04
1
001

續高僧傳卷第四

譯經篇四 本傳一人

京師弘福寺釋玄奘傳

釋玄奘本名俗姓陳氏漢洲偃師人二親早喪昆季相養兄素出家即捷法師也容貌堂堂儀局瓌秀講釋經義聰班群伍住東都淨土寺以奘少罹窮酷携以將之日授精理旁兼巧誦年十誦維摩法華東都恒度便預其次自爾卓然梗正不偶明流口誦因緣略無閑缺都諸沙彌劇談掉戲奘曰經云乎夫出家者爲無爲法豈復恒爲兒戲可詣徒喪百年且思濟之懷尚鄙而不取狀花出類故復形在言前耳時東都惠日盛弘法席涅槃攝論輪馳相係每恒聽受昏明思擇僧徒異其欣奉美其風素愛敬之至師友參榮大衆重其學功和開役務時年十五由是專門受業聲望逾遠大業餘齊丘飢交貿法食兩緣役此無所承沙門道基化開井絡法俗欽仰乃与兄從之行達長安住莊嚴寺又非本望西踰劍閣（4400）既達蜀都即而聽受阿毘曇論一聞不忘見

04
1
002

稱昔人隨言鏡理又高僧等至於婆沙廣論雜心玄義莫不鑿窮嚴穴條疏本幹然此論東被弘唱極繁章鈔異同計逾數十皆蘊結四府聞持自然至於得喪筌旨而能引用無滯時皆訶其憶念之力終古罕類也基每顧而歎曰余少遊講肆多矣未見少年神悟若斯人也席中聽侶僉号英雄四方多難總歸綿益相与稱贊逸口傳聲又僧景攝論道振迦延世号難加人推精覈皆師承宗據隅隩明鈴昔來攝論十二住義中表銷釋十有他家講次誦持率多昏漠而奘初聞記錄片無差舛登坐叙引曾不再緣須便爲述奘逾宿構如斯甚衆不可彈言武德五年廿有一爲諸學府雄伯沙門講揚心論不窺文相而誦注無窮時目神人不神何能此也晚与兄俱住益南空惠寺私自惟曰學貴經遠義重疎通鑽仰一方未成採賸有沙門道深體悟成實學稱包富權敦化振納趙郡憤發內心將損已蜀捷深知其遠量也情顧勤勸每勤勉之而正意已行誓無返面遂乃假緣告別間行江峽經途所及荊揚等洲訪逮道隣

042 莫知歸詣便北達深所委參勇鎧素龍嘉間
 043 縱洽無遺終始十月資承略盡時燕趙學侶
 044 相顧逢秋後發前至抑斯也沙門惠休道
 045 聲高邈行解相富夸■古今獨據鄴中昌言
 046 傳授詞鋒所指海內高尚又往從焉不面生
 047 來相逢若舊去師資礼事等法明偏爲獨講
 048 雜心攝論指摘纖隱曲示綱猷相續八月領酬
 049 無厭休又驚異絕嘆撫常而嗟曰希世若人
 050 爾其是也沙門道岳宗師俱舍闡弘有部
 051 包籠領袖吞納喉襟揚業帝城來儀群
 052 學乃又從焉創迹京都詮途義苑沙門法々
 053 常一時之最經綸教悟其從如林奘乃一舉
 054 十問皆陳幽奧坐中杞梓拔思未聞由是馳
 055 譽道流檀聲日下沙門僧解法輪論士機惠
 056 是長命來連坐吾之徒也但爲俱舍一論昔
 057 所未聞因爾伏膺曉夕諮請岳審其殷至
 058 惠悟霞明樂說不窮任其索隱覃思研
 059 採啐周究竟沙門玄會匠剖涅槃刪補舊疏
 060 更張琴瑟承斯令問親位席端諮質遲疑淡
 061 然祛滯奘射宋公■敬其脫類奏住莊嚴
 062 然非本志情栖物表乃又惟曰余周流吳蜀爰逮

063 趙魏末及周秦預有講筵率皆登踐已布之言令
 064 雖蘊胸襟未吐出之詞宗解籤無地若不輕生殉
 065 命誓往華胥何能具覲成言用通神解一觀明法
 066 了義眞文要返東華傳揚聖化則先賢高勝
 067 豈決疑於彌勒後進鋒穎寧輟想於瑜伽邪
 068 時年二十九也遂厲然獨舉詣闕陳表有司不爲
 069 通引頓迹■廣就諸蕃遍學書語行坐尋
 070 授數日傳通側席面西思聞機候會眞觀三年
 071 時遭霜儉下勅道俗豐四出幸因斯際徑往姑
 072 臧漸至燉煌路由天■裏粮弔影前望悠然但
 073 見平沙絕無人徑迴遑委命任業而前展轉
 074 因脩達高昌境初奘在涼洲講楊經論花
 075 夷土庶盛集歸宗商容通傳預聞蕃域高
 076 昌王麹文泰得信佛經復承奘奘告將遊西
 077 鄙恒置印■境次相迎勿聞行達通夕立候王
 078 母妃厲執炬殿前見奘苦辛備言意欲合宮
 079 下淚驚異希有延留夏坐長請開弘王命爲弟母
 080 命爲子珠礼厚供日時恒致乃爲講仁王等經及諸
 081 機教道俗係戀並願長留奘曰本欲通開大化
 082 遠被家國不辭賤命忍死西奔若如來語一
 083 滯此方非唯自戲發足亦恐觀爲法障乃不

04
—
004

04
—
005

084 三日僉見極意無敢措言王母曰今与法師
085 一遇並是往業因緣脫得果心未返願重垂
086 試誥遂与奘手傳香信誓爲母子趙氏流
087 淚執足而別仍勅殿中侍郎齎綾帛五百疋
088 二百二十四封并給徒騎六十人送至突厥業
089 牙所以大雪山北六十餘國皆其部統故重遣
090 達奘開前路也初至牙所信物倍多異於恒度
091 謂是親弟具以情告絡所不信可汗重其賄賂
092 遣騎前告所部諸國但有名僧勝地必令奘列
093 於是連騎數十盛若皇花中途經國道次參候
094 供給頓具倍勝於初自高昌至於鐵門凡一
095 十六國人物優劣奉信■疎具諸國傳其鐵門
096 也即鐵門開漠之西屏入山五百旁無異路一
097 道南出險絕人物太左右古石壁立千仞色相
098 如鐵故因号焉見漢門扉一豎一臥外鐵裏
099 木加懸諸鈴必掩此開寔惟天固南出斯門土
100 田温沃花菓榮茂地名觀貨羅也從千餘里廣
101 三千餘東■葱嶺西接波斯南大雪山北據鐵
102 門縛芻大河中境西流即經所謂博叉河也
103 其境自分爲廿七國各有君長信重佛教僧
104 以十二月十六日安居坐其春分以斯時温熱雨

105 多故也又前經國凡度十三至縛唱國土地華
106 博時俗号爲小王舍城國近葉護南牙也突
107 厥常法夏居北野花草繁茂放牧爲勝冬處
108 山中用庶寒厲故有兩牙王都城外西南寺
109 中有佛澡灌可容斗許及佛掃尋并以佛牙
110 守護莊嚴殆難瞻觀奘爲國使躬事頂戴西
111 北不遠有提謂波利兩城建塔表靈即爰初
112 道成獻妙長者之本也髮爪塔也又東南行
113 大雪山中七百餘里至梵衛國僧有數千
114 學出世部王城北山有立石像百五十尺城
115 東臥佛長千餘尺並精舍重接金寶莊校
116 晃曜人目見者稱嘆又有佛齒舍利劫初緣
117 覺齒長五寸許金輪王齒長三寸許并商那和
118 修益及九條衣絳色猶存又東山行至遊畢
119 試國奉信彌勝僧有六千多大乘學其王歲
120 造錄像舉高丈八延請追邇廣樹名檀國有
121 如來爲菩薩時齒長可寸餘又有其髮引長
122 尺餘放還螺旋自斯地北民雜胡戎制服威儀
123 不參大夏名爲邊國蜜利車類唐言譯之垢濁
124 種也又東南七百至濫波國即印度之北境矣
125 言印度者即天竺之正名猶身毒賢豆之訛号

耳論其境也北背靈山三^{〔4460〕}大海地形南狹如
 月上弦川平廣衍周九万里七千餘國依止其
 中時或乖分略地爲國今則盡三海際同一王
 命又東雪山那伽羅昌國即布髮掩泥之故地
 也詳諸經相意有疑焉何則計尋本事乃
 在賢劫已前蓮花[■]光名殊三佛既非同劫
 頻被火災何得故處今猶泥濕若以爲虛佛
 非妄語如彼諸師各陳異解有論者言此賢
 本地佛非妄也雖經劫懷本空之處願力莊
 嚴如因事也並是如來流化斯迹常在不足
 恠矣故其勝地左則標樹諸窠觀波即靈
 塔之正名猶偷婆斗薺婆之訛号耳阿
 育王者此号無憂恨不觀佛興諸戀戀經
 是聖迹皆起銘記故於此處爲建石塔
 高卅餘丈又有石壁佛影蹈迹衆相皆豎標
 記並如前也城南不遠鹽羅城有頂佛骨周
 尺二寸其相仰平形如天蓋佛髑髏蓋如荷
 葉盤佛眼圓晴狀如奈許澄淨皎然有佛大
 衣其色黃赤佛之錫杖以鐵爲環紫檀爲
 筴此五聖迹同在一城固守之務如傳國寶
 北近突厥昔經侵奪雖至所在還潛本處

斯則赴緣隱顯未^{〔4461〕}在兵威壯奉觀靈相悲
 淚橫流手揆末香親看體狀倍增欣悅即以
 和香印其頂骨觀有嘉瑞又增悲慶近有
 北狀大月支王欲知來報以香取相乃示
 馬形甚非所望加諸布施積功懺悔又
 以香取現師子形雖位狩王終爲畜類情
 倍歸依又以加施戒乃現人天方還本國
 故其俗法見五相者相一金錢取其相者酬
 七金錢俗利其寶用充福物既非僧掌固守
 彌崇無論道俗必先酬價被焚王命觀視其
 周旁國諸僧承斯榮望同來札謁又東山行至
 健駄羅國佛寺千餘民皆雜信城中素有
 盜廟衆事莊嚴昔如來盜經於此廟乃數百
 年今移波斯王宮供養城東有迦膩王大塔
 基周里半佛骨舍利骨舍利一斛在中舉
 高五百餘尺相輪上下廿五重天火三災今
 正營構即在中所謂雀離浮圖是也無魏靈
 太后胡氏奉信情深遣沙門道生等齎大旛
 長七百餘尺往彼掛之脚財及地即斯塔也
 亦不測雀離名生所由左側諸迹其相極多近
 則世親如意造論之地遠則捨於千眼睽奉

168 二親檀特名山達拏本迹仙爲女乱佛鬼化
169 母並在其境皆無憂王爲建石塔高者數百
170 餘尺立標記焉自山行遠焉長那國即世中
171 所謂北天竺焉長國也其境周輪五千餘里果
172 實充備爲諸國重傳云即昔輪王之苑囿也
173 僧有万餘兼大乘學王都四周多諸古迹忍
174 仙佛跡半偈避■析骨畫經割肉代鴿蛇藥
175 護命血飲夜叉如斯等相備列其境各具瞻奉
176 情倍欣々城之東北盛三百里大山龍泉名阿
177 波邏即信度河之大源西南而流經中所謂辛
178 頭河也王都東南越山逆河鐵橋棧道路極
179 懸險千有餘里至極大川即古焉伏之王都也
180 中有木慈氏像高百餘尺即末田地羅漢將
181 諸工人三返上天方得成者身相端嚴特難
182 陳說還返焉伏南至咀叉始羅國具見伊羅
183 鉢龍所住之他月光決因之地育王標塔舉
184 高十丈北有石門殊極高大崇棟重山道由中
185 遇斯又薩埵捨身處也自此東南山行險
186 阻經一小國度數鐵橋減二千里至迦濕彌羅
187 國即此俗常傳罽賓是也莫委罽賓由何
188 而生觀其固城同罽賓耳本是龍海羅漢

04
—
008

189 取之引衆而住通三藏也故其國境四面
190 負山周七千餘里門徑狹近僧徒五千多學
191 小乘國有大德名僧勝焚就學俱舍正理因明
192 聲明及大毘婆沙王愍遠乃王給書手十人供給寫
193 之有佛牙長可寸餘光白如雪白濫波至此統高
194 諸國形體鄙薄俗習胡蕃雖預五方非印
195 度之正境也以徑居山谷風雜諸邊自此
196 南下通望無山將及千里至磔迦國土據平川
197 周万餘里兩河分注卉木繁漸次東南路經
198 六國多有道迹亦育王標塔高二十丈者其
199 數不少中有末薊菟羅國最饒縱緒城東六
200 里有一山寺昔烏波毬多唐言近護即五
201 師之一也是其本住所建北巖石室高二
202 十丈餘廣卅步其側不遠復有獼猴隨坑處
203 四佛經行處賢聖依住處靈相衆矣又東
204 南行經于七國至劫比國俗事大自在天其
205 精舍者高百餘尺中有天根形極偉大
206 謂諸有趣由之而生王民同敬不爲鄙恥諸國
207 天祠率置此形大都異道乃有百數中所高者
208 自在爲多有一大寺五百僧徒淨人僕隸乃
209 有數万皆宅有寺側中有三道階南北而烈

210 即佛爲母忉利安居夏竟下天帝釋之所作也
 211 寶階本基論沒盡後王倣之在故地猶高七十
 212 餘尺育王爲建石柱高七尺餘光淨明照隨
 213 人罪福影現其中旁有賢劫四佛經行石基
 214 長五十許步高于七尺足蹈所及皆有蓮花
 215 文生焉國西北不遠二百許里至羯若鞠闍
 216 國唐言曲女城也王都臨菟伽河即洹河之
 217 正名矣源從北來出大雪山其土邪正雜敬僧
 218 徒盈万多諸聖迹四佛行坐七日說法處佛
 219 牙髮爪等塔精舍千餘名寺異相多臨河北
 220 ■於此國學佛使日胄二毘婆娑於毘耶犀那
 221 所經于三月比王号戒日正法治世將五十載言
 222 戒日者論法之名此号薨後量德以贈彼土初
 223 登即先■号以減後美之唐名耳今猶御世
 224 統五印度初治邊陲爲小國也先有室商佉王威
 225 行海內酷虛無道創殘釋種拔菩提樹絕其根
 226 苗選簡名德三百餘人留之餘者並充如疑戒
 227 日深知樹於禍始也與諸官屬至菩提坑立
 228 大誓曰若我有福統臨海內必崇建佛法願菩
 229 提樹從地而生言也尋視見菩提萌坑中上
 230 踊遂迴兵馬往商佉所威福力故當即除滅

興聖寺本『統高僧伝』卷四玄奘伝（吉村）

231 所以抱言誠篤倍發由來還統五方象兵八万軍
 232 威所及並藉其力素不血食化境有羊皆贖施僧
 233 用供乳酪五十年一施傾其帑藏々盡還蓄時
 234 至復行用此爲常有化王法乃至叛逆罪應
 235 死者遠行邊裔餘者徵罰蓋不足言故諸國
 236 中多行盜竊非假伴援不可妄進又東南行
 237 二千餘里經于四國達僑彌爾外道殷盛王
 238 都城中有佛精舍高六十尺中有檀像即
 239 昔優田大王造之置在天之影也其側龍窟
 240 聖迹多矣又東北千餘里至室羅伐悉底國
 241 即舍衛國舍婆提之正名也周睇荒毀財有
 242 故基斯匿治宮須達故宅趾墟存焉城南五
 243 里有逝多林即祇陀園也勝軍大臣善施所造全
 244 寺頽滅尚有石柱舉高七丈育王標樹邊有
 245 博室一區中安如來爲母說法像自餘院宇湮
 246 沒蕩盡但有佛洗病比丘處目連舉身于衣處
 247 佛僧常汲故井處外道張謗殺姪女處佛異
 248 論處身子拘處瑠璃沒處得眼林處迦葉彼
 249 佛本生地諸如上處皆建石塔並無憂王之所
 250 造也寺東不遠三大深坑即達調瞿波戰
 251 遮女人所沒之處坑於極邃臨望無底自

252 古及今大雨供注終無溢滿又東將七百里
253 至劫毘羅代宰堵國即毘羅衛淨飯王所治之
254 都也室空城十餘無人栖住故宮甌城周十五里
255 荒寺千餘惟宮中一所在焉王寢殿基上有
256 銘塔即如來降神之處也彼有說云五月八日
257 神來降者上坐部云十五日者与此方述微
258 復不同豈有異邪至如東夏所尚素王爲聖將
259 定年等前達尚迷況復曆有三代述時紀号
260 猶自著差殊領惟理越情求赴機應咸皆乘
261 權道適變爲先豈以常人之耳目明通於
262 至極也城之南北有過去二佛生地諸塔育王
263 石柱銘記甚多都城西北數百千塔並是瑠々
264 璃所誅諸釋既是聖城西北者後人爲造當斯
265 時也有四釋子忿其見逼不思犯戒出外拒軍
266 瑠璃遂退還本國城中不受告曰五爲法種誓
267 不行師汝退彼軍非五族也既被放斥遠授諸國
268 本是聖胤競宗樹之今焉伏梵衍等王並其
269 後也城東百里即是如來生地之林今尚存焉
270 或有說者三月八日上坐部云十五日也此土諸
271 經咸云四月八日斯亦感見之機異計多耳
272 又東七里方至拘尸中途諸異略不復紀創

04
—
011

273 達此城不覺五情失守崩踊蹙地頃之顧眄
274 但見荒城頽褫純陀宅基有標誌耳西北四
275 里河之西岸即安羅大林周匝輪經三十餘
276 里中央高竦即涅槃地有一甌室臥象北首
277 旁施塔柱具書銘記而諸說混循通烈上有云
278 二月十五日入涅槃者惑云九月八日入涅槃者
279 惑云自彼至今過千五百年者惑云過九百
280 年者城北度河即焚身地方二里餘深三大
281 許上尚黃黑狀同焦炭諸國有病服其土者
282 無不除愈故其焚處致有効耳其側復有現
283 足分身雉鹿諸塔並具瞻已又西南行大深
284 林中七百餘里達婆羅痾斯國即常所
285 謂波羅奈也城臨苑伽外道殷盛乃出万
286 計天寺百餘多遵自在僧徒三千並小乘正
287 量部也王親東北彼羅奈河之西塔柱雙建
288 育王所立影現佛像觀者興敬度河十里即
289 鹿野寺也周閭重閣望若仙宮僧減二千皆
290 同前部佛事高勝諸國最矣中有轉法輪像
291 狀如言說旁樹石柱高七十餘尺內影外
292 現衆相備矣斯即如來初轉法處其側復
293 有五百獨覺塔三佛行坐處寺中銘塔靈迹

294 極多乃有數百又有佛所給池浣衣洗器之
 295 水皆有龍護曝衣方石鹿王迎佛之地並建石
 296 塔動高三百餘尺相甚弘偉故略陳耳順
 297 河東下減於千里達吠舍釐即略舍離也露
 298 形異術偏所豐足國城舊基周七十里人物
 299 宣鮮但爲名地其中說淨名經處寶積淨名
 300 諸故宅處身子證果處姨母減度七百結
 301 集處阿難分身處此之五處各建勝塔標示
 302 後伐自斯東北二千餘里入大雪山至尼波
 303 羅國純信於佛僧有二千大小兼學城東有
 304 池中有天金光浮水上古老傳云彌勒下生用
 305 爲首飾惑有利其寶者夜往盜之但見火衆
 306 騰焰都不可近今則沈深亘窮其底水又極
 307 熱難得措足唐國使者誠火投之焰使踊
 308 起因用煮來便得成飯其境比界即東女國
 309 与吐蕃接比來國命往還率由此地紉指
 310 爲諸唐梵相去一万餘里自古迴適致途遠
 311 阻又從梵吠舍南濟宛河達摩伽陀国摩竭
 312 提之正号也其國所居是爲中印度矣今王祖
 313 胤繼接無々憂々即頻毘娑羅之曾孫也王
 314 即戒日之女婿矣今所治城非古所築宛伽

315 南岸有波吒釐城周七十里即經所謂花氏
 316 城也王宮多花故因名焉昔阿育王自離王舍
 317 遷都於此左側聖所其量彌繁城之西南
 318 四百餘里度尼連禪河至伽耶城人物希少
 319 可千餘家又行六里有伽耶山自古諸王所登
 320 對也故此一山世稱名地如來應俗就斯成道
 321 頂有石塔高百餘尺即寶雲等經所說之處周迴四十
 322 里內聖迹充滿山之面南即道成處有餘剛坐周百
 323 餘步其地則今所謂菩提寺是也寺南有菩提樹
 324 高五丈許遶樹周垣壘甃爲之輪迴五百餘
 325 步東門對河北門通寺院中靈塔相狀多
 326 矣如來得道之日互說不同惑云三八日及十五日
 327 者恒比門外大菩提寺六院三層牆高四丈
 328 皆甃爲之師子國王買取此處興造斯寺僧
 329 徒僅千大乘上坐部所住持也有骨舍利狀
 330 人指節肉舍利者大如眞珠彼土十二月卅日
 331 當此方正月十五日世稱大神變月若至
 332 其夕必放光瑞天雨花充滿樹院焚初到
 333 此不覺悶絕良久蘇醒歷觀靈相昔聞經說
 334 今宛目前恨居邊鄙生在未世不見眞容陪
 335 復悶絕旁有梵僧就地接撫相与悲慰雖

336 備礼謁恨無光瑞停止安居迄於解坐彼士
337 常法至於此時道俗千万七日七夜競申
338 供養凡有兩意謂觀光及希樹葉每年
339 樹葉拾至夏末一時飛下通夕新抽与故齊
340 等時有大乘居士爲奘開釋瑜伽師地爾夜
341 對講忽失燈明又觀所佩珠璫瓔珞不見
342 光采但有通明晃朗内外綢然而不測其由
343 由也恠斯所以共出草盧望菩提樹乃見有
344 僧手擎舍利大如人指在樹其上遍示大衆
345 所放光明照燭天地于時衆闍但得遙礼日
346 雖觀瑞心疑其火合常虔跪乃至明晨心漸
347 萎頓光亦歇滅居士問曰既觀靈瑞心無疑
348 邪奘具陳意居士曰余之昔疑還同此也
349 其瑞既現疑自通耳余見菩提樹葉如此
350 白楊具以問之奘曰相狀略同狀疎茂盛少
351 有異也於此寺東望屈々吒播陀山即經所
352 謂鷄足山也直上三峰狀如鷄足因取号焉
353 去菩提寺一百里頂樹大塔夜放神炬
354 光明通照即大迦葉波寂定所也路極梗
355 踞多諸林竹師子虎象縱橫騰倚每思
356 登踐取進無由奘乃告王請諸防禦象

04
—
014

357 給兵三百餘人各備鋒刃斬竹通道日行
358 十里爾時彼國奘往山士女大小數盈十方
359 奔隨繼至共往鷄足既達山阿壁立無路
360 乃縛竹爲梯相連而上達山頂者三千餘人
361 四睇欣然轉增喜踊具觀石罽敬花供養
362 自山東北百有餘里至陀伐那山有大石室
363 佛曾遊此天帝就石塗香以供行至其處
364 今猶郁烈不遠山室可受千人如來三月於
365 中夏坐岳石爲道廣廿步長五里許即頻毘
366 沙羅修觀上山之所由也又東六十便至矩
367 夸揭羅補古城唐言弗城多出香弗故因
368 名也其城即摩揭陀之正中經本所王舍
369 城者是矣崇山四周爲其外郭上如僻倪皆
370 輒爲之西通小徑北闢山門廣長從狹周
371 輪百五十里其中宮城周卅餘里內諸古
372 迹其眞復多宮之東北可十五里有始栗
373 陀羅矩吒山即經所謂老闍崛山者是也唐
374 言鷲峯之臺於諸山中最顯映奪接
375 山之陽佛多居徑從下至頂編石爲階廣十
376 餘步長六里許佛常往來於斯道也歷
377 北門強一里許即迦蘭陀竹林精舍石基

東戶輒室今仍現在自園西南行六里許
 南山之陰大竹林中有石室焉即大迦葉
 波与千無學結集經教所託之地又西廿
 餘里即大衆部結集處也山城之北可五
 許至曷羅闍姑利泗城唐言新王舍也
 餘傳所稱者是矣又北卅餘里至那爛陀寺
 唐言施無厭也瞻部洲中寺之最者勿高
 此矣五王共造供給倍隆故因名焉其寺
 都有五院同一大門周閭四重高八丈許
 並用輦置其最上壁厚六尺外郭三重牆
 有花畜嚴麗可觀自置已來防衛清■
 女人非濫未曾容隱常住僧衆四千餘人外
 容道俗通及邪正乃至萬數皆周給衣食
 無有窮竭故復号寺爲施無厭也中有
 佛院備諸聖遠精舍高者廿餘丈佛昔於
 中四月說法又有精舍高卅餘丈中諸變
 態不可名悉量立銅像高八丈餘六層閣
 盛莊嚴綺飾即戒日之兄滿■王造也又
 有鑰后精舍高可八丈戒日親造彫莊未
 備日役千功彼國常法欽敬德望有諸論
 師智識清遠王給封戶乃至十城漸降量

興聖寺本『続高僧伝』卷四玄奘伝（吉村）

■不減三城其寺現在受對大德三百餘
 人通經已上不常僧役重愛學問諮訪
 異法故焉耆已西被於海內諸出家者皆
 多義學任國往返都無隔礙王雖守國不
 敢遮障故彼學徒博聞該譎率由於此契
 初建寺義學有聲諸有內外聞皆歸赴十
 有八日豎大論場邪正翕集乃有萬數思
 欲讎擊三千餘人既登無坐以已舊解用
 相抗對得無殿後僧衆大悅各稱慶快佛
 法興矣乃令邊僧權智若此又此寺法通
 達三藏員置十人素來闕一周訪未獲
 以契言問博詣用充其位和僧永住日給
 上饌廿盤初感斯供辭辭不敢受僉日寺
 法恒爾客僧初至觀其解通三藏者給
 廿盤即廿日餘者漸減通一經者猶須前
 供五艇五日過已往自依常限時有順世外
 道執計四大爲人物因情議沆蜜最難徵
 覈承聞此寺豐諸論士故拘議盡僧堂戶
 戶尅日擊論彼土常法諸有寒者先令乘
 驢屎瓶澆頂公於衆中形心折伏然後依隨
 永充僕■且自義論之設機變適緣脫

一七九

420 致一差給身陷辱衆雖万數都無當者
421 奘經停既久薄究其術心愧通鄙聖行
422 言對便告大衆請与決論道俗胥悅遂
423 乃各立旁證邪正等數彼既陳理即施功
424 覈須臾交辨通解無路神理汨裊湔然
425 伏預是釋門一時騰踊僉命乘驢將夷
426 恥辱奘曰我法弘怒不在形情既致頗
427 當授正法異道稟受敬奉箴誨度脱之
428 後便往東印度境迦摩縷多國童子王所
429 以彼風俗並信異道故其部衆乃有數万
430 佛法雖弘未至其土王事天神愛重教義
431 但聞智人不問邪正皆一奉敬其人初染
432 佛法將弘聖化故於此国創開釋曲以事
433 達王嘆奘勝度童子初聞即使迎引既
434 達相見宛若親賓言議接對又經晦朔
435 斯國東境接蜀西蠻聞之途路兩月應
436 至戒日夫王聞臣告曰東蕃印度童子王
437 所有大脂那沙門大乘天者道德弘遠彼所
438 奉事請往致之其大乘天号即印度諸僧
439 美奘之目也或曰既聞即遣召与俱來會
440 中印印度自与宮属百餘万衆順河東下

04
—
017

441 同集摩伽一与面對歎然道合從爾長參
442 正坐論諸理義恃月經文迎還本邑曲女王
443 都觀其所設五年大施晚又辭還施無厭
444 寺初有論師名曰戒賢年將百歲大小通路
445 衆共推美其人即室商王佞之所坑者爲賊
446 擎出潜淪草莽後法重興開弘經論道俗
447 欽重戒日增邑十城戸也諸有科稅一住戒賢
448 賢乃以其稅物成立寺廣奘初奉謁哀歸
449 師傳授心啓請年雖遲暮課力敷渲瑜伽
450 師地即十七地也論十有三月方得一遍重
451 為再說九月方了論諸餘果論無暇旁求
452 此諸邑舉釋宗繞周大小故偏所續習經
453 於五載薄知綱領將行博議末忍東旋賢乃
454 誠曰五老矣見子徇命求法經途十載方達
455 茲土不辭朽老重為申明法貴流通豈期
456 獨善更參他部恐失時緣智無法也
457 可還本國即為莊嚴行調付給經論奘曰
458 敢聞命矣意欲南巡諸國還途北指以高
459 曷昔言不得違也便爾東行大山林中至伊
460 爛拏國見佛坐迹入石寸許長五尺二寸廣
461 二尺一寸旁有瓶迹沒石寸許入出花文都似

462 新置有佛立跡長尺八寸闊強六寸又東
 463 南行路經五國將四千里至三摩呬吒國濱
 464 斥大海四佛曾遊見青玉像舉高八尺自斯
 465 東北山海之中凡有六國即達林邑道阻且
 466 長■夕障厲故不遊踐又從西行將二千里
 467 達羯羅拏國邪正兼事別有三寺不食乳
 468 酪調達部也又西南行七百余里至焉莽國
 469 東境臨海有發行城多有商侶停於海次
 470 南大海中有僧伽羅國謂執師子也相去約
 471 指二百餘里每夜南望見待國中佛牙塔
 472 寶珠光明騰焰暉赫現於天際又西南行具
 473 經諸國並有異迹可五十里至橋薩羅國
 474 即南印度之正崇信佛法僧徒万計
 475 其土寬廣林野相次王都西南三百餘里
 476 有里峰山昔古大王為龍■菩薩造立斯寺
 477 即龍樹也寺上下五重鑿石為之引水
 478 旋注多諸變異沿彼達今淨國守罕有
 479 登者龕中石像形極偉大寺成之日龍猛就
 480 山以藥塗之變成紫金世無等者又經藏
 481 甲縛無數石老相傳盡初結集並現存
 482 在雖外佛法屢遭誅殄而此一山住持無改

483 近有僧來於彼夏坐但得讀誦不許持出具
 484 陳此事但路幽阻可尋又復南行七十餘
 485 里路經五國並有靈迹至秣羅知吒國即瞻
 486 部最南濱海境也山出龍腦香焉旁有巖
 487 頂清流統旋廿許匝南注大海中有天宮
 488 觀自在菩薩常所徑即即觀世音之正号
 489 也臨海有城古師子國今入海中可三千餘
 490 里非結大伴則不可至故不行也自此西北
 491 四千餘里中途經國具諸神異達摩勅他
 492 國其王果象威英自在未賓戒日寺有百餘
 493 僧徒五千大小兼學東境山寺羅漢所造有
 494 大精舍見者無不嘆訶駁斯神也自此因循
 495 廣行諸國還中印度抄寫新經東莊首路
 496 行宛河側忽被秋賊須人登天同舟卅許人
 497 悉被執縛唯選契公北充食調結壇河上
 498 置契壇中初便生饗將加鼎鑪當斯時
 499 也取救無緣注想東夏住持三寶私發
 500 誓曰餘運未絕會蒙放免必其無遇命也
 501 如何同舟一時悲啼號哭告諸賊曰此人愍
 502 不辭危難專心為法利益邊垂君若殺人
 503 罪莫大也寧殺我等不得損他衆賊聞之

504 投刃札愧放隨所往仍舊經論餘國傳貨
 505 重還本寺更集經論不久之間戒日聞之
 506 重勅所部通送出境并親青象以充駄運
 507 奘爲形極充大日別常料草冊圍餅食
 508 所須又三斛許辭以實力不能勝致戒日又
 509 勅齊所統境隨國供擬非所構者以諸及
 510 之諸有梵僧又勸受施皆曰斯勝相也佛
 511 減度來王雖崇敬種々布施未聞以象用
 512 及釋門象爲國寶今既見惠信之極矣因
 513 即納之然其象也其形圓大高可丈三長
 514 二大許上容八人并諸什物經像等具並
 515 在其上相狀如重都似空行雖逢奔逸而
 516 安隱不墜瓶水不側緣國北旋出印度境
 517 戒日威被咸象供待入帛利國山川相半沃
 518 壤豐熟僧徒數萬並學大乘東北行過諸
 519 城邑上大雪山及之其頂諸山並下又上三
 520 日達最高嶺南北通望但見橫山各有九
 521 重過斯已往皆是平地雖有小山孤斷不
 522 續唯斯一嶺蔓延高遠約略爲言瞻部
 523 一洲山叢斯地何以知邪至如血境波斯平
 524 川眇漫東尋崑崙莫有窮蹤北則橫野

04
|
020

525 蕭條南則印度臯衍即經所謂香山者也
 526 達絕幽邃未可尋源四河所從皆由斯山爾
 527 耶所謂崑崙之靈豈非斯邪案諸禹貢河
 528 出積石蓋局談其潛出處耳張騫尋之乃
 529 遊大夏固是超歩口經猶不言其發源之
 530 始斷可知矣奘引徒前後自勒行衆沿嶺而
 531 下三日至地達觀貨羅諸故都邑山行八百
 532 路極艱險寒風切骨到於活國中途所經
 533 皆屬北狹而此王者突厥之胤纔管諸胡
 534 總御鐵門以南諸小國也自此境東分入
 535 葱嶺々據瞻部洲中南接雪山北至熱海
 536 東漸烏鐸西極波斯縱廣結固各數千里
 537 冬夏積雪水巖崖濂過半已下多出山葱
 538 故因名焉昔人云葱嶺停雪即雪山也今
 539 親目驗則知其非雪山乃居葱嶺已南
 540 東西亘海南至平野北達叢山方名葱嶺
 541 又東山行經於十國二千餘里至達摩悉鐵
 542 帝國境在山間東西千六百里南北極廣
 543 不踰四五里許臨縛河從南而來不側其
 544 本僧寺十餘有一石像上施金銅圓蓋
 545 人有旋達蓋亦隨轉豈由機巧莫測其然

又東山行近有千里達商弥國東至大川
 廣千餘里南北百餘里絕無人住川有龍
 河東西三百南北十其池正在大葱嶺內
 內瞻部洲中最高地也何以明之地出二
 河其西流者至達摩悉鐵國與縛[■]河合
 自此已西水皆西流其東流者至佉沙西界
 與從多河合自此已東水皆東流故分二河
 各住兩海故知高也池出大象卵如升許案
 條支國大卵如雍豈非斯邪又東五百至
 竭盤陀國北背從多河即經所謂悉陀河
 也東又塩澤^{ṣaṭṣaṭ}階於地中涌於積石爲東
 夏河矣國崇信佛法城之東南三百餘里
 大崖兩室各一羅漢現入滅定七百餘年
 須髮漸長左近諸僧年別爲剃又東千餘
 方出葱嶺至烏鎡國城臨徙多西有大山
 崖自崩墜中有僧焉宜目而坐形甚奇偉頰
 髮下垂至於肩面問其委由乃迦葉佛時人
 矣近重崩崖沒於山內焚至斯國與別行先
 度雪河象脫分至水漸沆張不悉山道尋
 嶺直下牙衝岸樹象性凶獷反拔却頓固
 即致死悵悵所經已越山險將達平壤不果

祈願東過踈勒乃至涅槃可千餘里同伴
 五百皆共惟奘爲大商至處位中營四
 面防守且自涅槃一國素來常鎮十部大
 經各十万偈如前所傳國寶護之不許
 分散今屬突厥南有大山現三羅漢入滅
 盡定東行八百達于道國地惟沙壤寺有
 百餘僧徒五千並小乘學城西山寺佛僧極
 踐有大石室羅漢入定石門對掩初奘既
 度葱嶺先遣侍人齋[■]陳露違國化也
 下勅流問令早相見行達于道以象致死所
 齋經像交無運致又上表請尋下別
 勅令于遁王給其案乘既奉嚴 勅駝馬
 相運至于沙洲又蒙別勅計其行程酬雇價
 直自爾乘傳廿計乘以貞觀十九年正月廿
 四日届于京郊之西道俗相趨屯赴閭闔
 數十万衆如值下生將欲入都人物諸擁
 取進不前遂停別館道夕禁衛候備遮
 斷停住道旁徒故城之西南至京師朱崔衛
^{ṣaṭṣaṭ}
 之都亭驛廿餘里列衆札謁動不得旋
 于時駕幸洛陽奘乃留諸經像送弘福
 寺京邑僧衆色競列幢帳助運莊嚴四

608 607 606 605 604 603 602 601 600 599 598 597 596 595 594 593 592 591 590 589 588
部諠譁又倍初至當斯時也復感瑞雲現
于毘團圓如蓋紅白相映當于像上頭發
輪光既非遠日同共嗟仰從午至晡像入弘
福方始歇滅致使京都五日四民廢業七衆
歸承當此一時傾仰之高終右罕類也奘
雖逢榮問獨守館宇坐鎮清困恐陷物議
故不臨對及至洛濱時像問并獻諸國異
物八馬馱之別勅引深宮之內殿奉面天顏
談叙真俗無爽帝旨從卯至酉不覺時延
迄于閉鼓上即事戒旃問罪遼在明旦將發
下勅同行固辭疾苦兼陳翻譯不韋其請
乃勅京師留守國公房玄齡寺知監護
資備所須一出天府初奘在印度聲暢五
天稱述脂那人物爲盛戒日大王并菩提
僧思聞此國爲日久矣但無信使未可依
憑彼土常傳瞻部一洲四王所治東謂脂那
主人王也西謂波斯主寶王也南謂印度
主象王也北謂檢枕主馬王也皆謂四國
藉斯以治即因爲言奘既安達拾述符同
戒日及僧各遣中使喪諸經寶遠獻東夏
是則天竺信命自奘西通宣述

04
—
023

629 628 627 626 625 624 623 622 621 620 619 618 617 616 615 614 613 612 611 610 609
皇猷之所致也使既而西返反勅王玄策等
廿餘人隨往大夏并贈綾帛千有餘段王
及僧等數各有差并就菩提寺僧召石蜜
匠乃遣匠二人僧八人俱到東夏尋
勅往越州就甘蔗造之皆復成就先是菩
提寺僧三人送經初至下
勅普請京城設齋仍於弘福譯大嚴等經
不久之間奘信又至乃勅且停待到方譯主
上虛心仰頻下明勅令奘速至但爲事故
留連不早程達既見路宮深沃靈相即陳翻
譯掾摺賢明上曰法師唐梵具瞻詞理通
敏將恐徒楊仄陋終虧曲奘曰昔者二秦
之譯門位三千雖復翻傳猶恐後代無聞
壞疑乖信若不搜舉同奉玄規豈以論
能妄參朝委頻又固請乃蒙降許帝曰
自法師行後造弘福寺其處雖小禪院
虛靜可爲翻譯所須人物史力並与玄齡
商量務令優給既承明命返迹京師遂召
沙門惠明靈闡等以爲證義沙門行友
玄蹟等以爲綴緝沙門智證等以爲錄文
沙門玄橫以證梵語沙門玄應以定偽

其年五月創翻譯大菩薩藏經廿卷
 630 余爲執筆弁那綴詞理其經廣解六度
 631 四攝十力四無所畏卅七品法菩薩行舍十
 632 二品將四百紙又復旁翻顯揚聖教論
 633 廿卷智證等更造錄文沙門行友詳義理
 634 文句契公於論重加陶練次又翻大乘對
 635 法論一十五卷法門玄蹟筆受微有餘隙
 636 又出西城一十二卷沙門辯機親受時事
 637 紕前後兼出佛見六門神呪等經都合八
 638 十許卷自前代已來所譯經義初從
 639 梵語到象本文次乃迴之順同此俗然後筆
 640 人親理文句中問憎損多墮金言今所翻
 641 傳都由契旨意里獨斷出語成章詞人隨寫即
 642 可披翫尚賢吳魏所譯諸文但爲西梵所重
 643 貴於文句鉤瑣聯類重沓（*anacoluthon*）在唐文頗居
 644 繁複故使綴工專司此位所貫通詞義加
 645 度節之銓本勒成祕書出繕寫契乃悉
 646 表上并請序題尋降手勅曰法師風標
 647 高行早出塵表泛寶舟而登彼岸搜妙通
 648 而闢法門弘闡大猷蕩滌衆累是以慈雲
 649 欲卷舒之
 650 四空惠日將民朗之照八極舒朗

651 之者其唯法師乎朕學淺心拙在物猶迷
 652 況佛教幽微豈敢仰測請爲經題非已所聞
 653 其新撰西域傳者當自彼覽契以弘贊之
 654 極勿尚帝王開化流布自古爲重又表伏
 655 奉墨
 656 勅猥垂獎喻祇奉綸言精守振越玄奘業
 657 尚空踈謬卷法侶業屬九瀛布截四表無塵
 658 虞憑里靈以遠征特國威而訪道窮進冒
 659 險雖勵遇誠纂異懷荒寔資朝化所獲
 660 經論奉勅翻譯見成卷軸未有詮序伏惟
 661 陛下睿思雲敷天華景爛理色繁旁調逸
 662 咸英跨千石以飛聲掩百王而騰實竊以
 663 神力無方非神思不足詮其理聖教玄遠
 664 非聖藻何以序其源故乃冒犯威嚴敢
 665 希題目宸睠冲貌不垂矜許撫躬累息相
 666 顧失圖玄奘聞日月麗天既分暉於戶牖江
 667 河紀地名流潤於巖涯雲和廣樂不祕響
 668 於聲味壹璧奇珍豈韜彩於愚瞽敢緣
 669 斯理重以干祈伏乞雷雨曲垂天文府照配
 670 兩儀而同久与二耀而俱懸然則鶩嶺微
 671 言假神筆而弘遠鷄園奧義託英詞而宣

692 暢豈逼之梵衆獨荷恩榮亦使蠢々迷生
691 方超塵累而表奏之日勅乃許焉仍寫新
690 經遠頒國故一序文通於三藏其詞曰蓋
689 聞二儀有象顯覆載以含生四時無形潛寒
688 暑以化物「云々」辭多不載奘又表謝曰竊聞
687 六爻探隲局於生滅之場百物正名未涉眞
686 如之境猶且遠徵義冊觀奧不測其神迎相
685 軒圖歷選並歸其美伏惟 皇帝陛下
684 玉毫降質金輪御天廓先王之九洲掩百
683 千之日月斥列代之區域網恒沙之法界遂
682 使給園精舍並入隄封具葉靈文咸歸冊
681 府玄奘往因振動聊謁崛山經途万里怙天
680 威如咫尺匪乘葉■雙林如食頃搜揚三藏
679 盡龍宮之所儲研究一乘窮鷲嶺之遺旨
678 並已載於白馬還獻紫宸尋蒙下詔賜使
677 翻譯玄奘識乖龍樹謬忝傳燈之榮才異
676 馬鳴深愧寫瓶之敏所譯經論紕舛尤多
675 遂荷天恩留神構序文超象繫之表若聚
674 日之放千光理括衆妙之門同惠雲之濡百
673 草一音演說億劫罕逢忽以微生親承梵
672 響涌濯歡喜如聞受記表奏之日尋下

04
026

693 勅曰照才謝珪璋言慚博遠至於典內尤所
692 未聞昨製序文深爲鄙拙惟穢翰墨於金
691 簡標乞礫於珠桑忽得來書謬承褒贊詞
690 躬省慮弥益厚顏善不足稱空勞致謝
689 自爾朝宰英咸申擊贊釋宗弘盛氣
688 接成陰皇太子述 上所作三藏聖教序曰
687 夫顯揚正教非智無以廣其文崇闡微言
686 非賢莫能定其旨「云々」文廣不可具載弘
685 福寺僧欣奉中興慶斯榮泰乃以序文
684 勒雙玄石足使万右匠退風景仰天贊故其
683 表「云々」下勅許之今之門首大碑是也及使
682 再返又勅廿餘人隨往印度前來國命通
681 議中書勅以還城方言務取會若非伊人
680 將綸聲教故諸信命並資於奘乃為唐
679 言依彼西梵文詞輕重令彼談者尊崇東
678 夏尋又下勅令翻老子五十文為梵言以
677 達西域奘乃召諸黃巾述其玄奧領疊詞
676 旨方為翻述道士蔡日光成英等競引
675 釋論中百玄意用通道經奘曰佛道兩教
674 其旨天殊安用佛言用通道義窮數言
673 疏奉出無從晃歸情曰昔相傳憑佛教

714 教至於三論見所師遵准義幽通不無同會
 715 引解也如僧肇著論盛引者莊猶自申明
 716 不相為怪佛言似道何爽綸言奘白佛教
 717 初開深文尚擁老談玄理微附佛言肇
 718 論所傳引為聯類告以僉詞而來通極
 719 今經論繁當各有司南老但五千論無
 720 文解自餘千卷多是醫方至如此土賢
 721 明何晏王弼周顒蕭繹顧歡之徒動數十
 722 家徑解老子何不引用乃復旁通釋氏不
 723 乃推步逸蹤乎既依翻^{ニツケテ}了將對勤道士成
 724 英曰老經幽邃非夫序引何以相通請為
 725 翻之奘曰觀老治身治國之文々詞具矣
 726 叩齒咽液之序其言鄙陋將恐西聞異
 727 國有愧鄉邦英等以事聞諸宰輔奘又
 728 陳露其情中書馬周曰西域有道如李
 729 莊不奘曰九十六道並欲超生師承有滯
 730 致淪諸有至如順世四大之術冥初六諦之
 731 宗東憂所未言也若翻老序則恐彼以為
 732 嗟林遂不譯之當今正翻瑜伽師地卅餘卷
 733 其論梵本可十萬偈若度唐文應出百卷
 734 春秋卅有五年德俱々盛日吐新文請益

735 之徒後進非少自應別紀故不叙之余以^{「12612」}
 736 闇昧濫治斯席与之對晤屢展炎涼聽
 737 言觀行名實相守精厲晨昏計時分業
 738 虔々不懈專思法務言無名利行絕虛浮
 739 曲識機緣善通物性不俗不諂行藏適時
 740 吐味幽深辯開疑議寔季代之英賢
 741 乃佛宗之法將矣且發蒙入法特異倫聽
 742 覽經論用為恒任任既周東夏挹酌諸
 743 師披露肝膽盡其精義莫不傾倒林藪更
 744 新學府遂能不遠數萬諮求勝法誓捨
 745 命必會為期發跼張掖途歟龍沙中途
 746 艱險身心僅絕發達高昌倍光來價傳國
 747 祖送備閱靈儀路出鐵門石門躬乘沙嶺
 748 雪嶺歷天險而志逾慷慨遭凶賊而神弥
 749 厲勇兼以歸稟正教師承戒賢理遂言揚
 750 義非再授廣聞異論色藏■臆致使梵侶
 751 傾心不遺其法又以起信一論文出馬鳴彼
 752 土諸僧思承其本奘乃譯唐為梵通布
 753 五天斯則法化之緣東西立舉又西華餘
 754 論深尚聲明奘乃卑心請決隨梗曉致有^{「12613」}
 755 七變其勢動發異蹤三脩廣論俟張懷抱

756 故得施無厭寺三千學僧皆号智囊護
757 持城塹及觀其臂吻聽其詞義皆彈指
758 贊嘆何斯人也隨其遊歷寰外海東百
759 卅國道俗邪正承其名者莫不仰德歸依
760 更崇開信所以家國增榮光宅惟遠獻奉
761 歲至咸契之功若非天英靈生知聖授何能
762 振斯鴻緒導達蹤前後僧傳往天竺者
763 首自法顯法勇終于道邃道生相繼中途
764 一十七返取其通言華梵妙達文筌揚導國
765 風開悟^{^Tsuho}正莫高於奘矣
766 論曰觀夫翻釋之功誠遠大矣前錄所載無
767 得稱焉斯何故耶[■]以言傳理得惑遣道
768 清有由寄也所以列代賢聖祖述弘道之風
769 奉信賢明憲章翻譯之意宗師應轍頗見
770 詞人[■]既圓稍功其至如梵文天語
771 元開大夏之鄉象迹方韻出自神州之俗具
772 如別傳曲盡規猷遂有僥時譽叨臨傳述
773 逐轉銷詞返音列喻繁略科斷比事擬倫語
774 迹雖同校誠異自非明途前聖德邁往賢方
775 能隱括殊方用通弘致道安著論五失易窺
776 彥琮厲文八例難涉斯並古今通叙豈妄登

04
029

777 登臨若夫九所傳見存簡錄漢魏守本々
778 固去華晉宗傳々揚時開義寫情心共激
779 彼瀾永成通戊充車溢藏寶住持得在福
780 流失在訛競故勇々猛陳請詞同世華制本
781 受行不惟文綺至聖殷鑒深有其由群
782 籍何傳誠法故也即事可委況弘誠乎然
783 而習俗生常知過難改雖欲徒轍終陷前
784 蹤輿自漢明終于唐運翻傳梵本多信譯
785 人事語易明義求罕見厝情獨斷惟任筆
786 功縱有覆疎還遵舊緒梵僧執業相等情乖
787 音悟莫通是非俱濫至如三學成典惟詮
788 行旨八籍微言宗開詞義前翻後出靡墜
789 風猷古哲今賢聽殊恒律豈非方言重阻臆
790 斷是投世轉澆波奄同浮俗昔問淳厚邪
791 暢既在皇唐綺錦訛新窳鍾季葉不風
792 暢既在皇后鋒飾訛新窳鍾季葉不
793 思本實妄接詞鋒競掇芻蕘鄭聲難偃
794 原夫大學希言絕世持立八音四辨演暢無
795 恨安得凡懷虛參聖慮用爲標擬誠非立
796 言雖復樂說不窮隨類各解理開情外調
797 逸[■]中故當斧藻標奇文高金王方可聲

798 通天樂韻過恒致近者晉宋顏謝之文世高
799 尚爾而無比況卒於此安可言乎必重前蹤時
800 俗變矣其中蕪乱安足涉言往者西涼法
801 識世号通人後奉童壽時稱僧傑善■文
802 意妙顯經心會達言方風骨流便弘仰於世
803 不虧傳迷宋有開土惠嚴寶雲世係賢
804 明勃興前作傳度廣部聰輝絕蹤將非面
805 奉花肯親承詁訓得使聲流千載故其
806 然矣餘則事義相傳足開神府寧得如瓶
807 瀉水不妄勿流薄乳之喻復存於今日
808 矣世有樊公獨高聯類往還振動備盡
809 觀分百有餘國群臣謁敬言義接對
810 對不待譯人披析幽旨華戎胥悅故弘福之
811 譯不屑古人執本陳勘頻開前失既闕全
812 乖未遑釐正輒略陳此失復何言

續高僧傳卷第四

《校訂》

《04-001》續高僧傳卷第四

譯經篇四 本傳一人

京師弘福寺釋玄奘傳

〔出自・出家・修行〕

釋玄奘。本名禪。俗姓陳氏。漢州²偃師人。二親早喪、昆季相養。

兄素出家。即捷法師也。容貌堂堂、儀局瓌秀、講釋經義、聰班群伍、住東都淨土寺。以奘少罹窮酷、携以將之、日授精理、旁兼巧誦。

年十誦維摩法華。東都恒度、便預其次。自爾卓然梗正、不偶明流、口誦因緣、略無閑缺。都諸沙彌、劇談掉戲、奘曰。經不云乎。夫出家者爲無爲法。豈復恒爲兒戲、可謂徒喪百年。且思齊之懷、尚鄙而不取。拔萃出類故、復形在言前耳。時東都惠日、盛弘法席、涅槃攝論輪馳相係。每恒聽受、昏明思擇。僧徒異其欣奉、美其風素。愛敬之至、師友參榮、大衆重其學功、和開役務。

時年十五。由是專門受業、聲望逾遠。大業餘齊、兵飢交貿、法食兩緣、投庇無所。承沙門道基、化開井絡、法俗欽仰、乃與兄從之。行達長安住莊嚴寺。又非本望、西踰劍閣。

既達蜀都、卽而聽受阿毘曇論、一聞不忘、見稱昔人。隨言鏡理、又高倫等。至於婆沙廣論、雜心玄義、莫不鑿窮巖穴、條疏本幹。然此論東被、弘唱極繁、章鈔異同、計逾數十、皆纏結四府、聞持自然、至於得喪筌旨、而能引用無滯。時皆訝其憶念之力、終古罕類也。基每顧而歎曰。余少遊講肆多矣、未見少年神悟若斯人。

- 1 「禪」、原文になし。大正により加える。
2 「漢州偃師」、大正は「洛州緱氏」に作る。
3 「州」、原文は「洲」に作る。大正により改める。
4 以下同じ。
5 「捷」、大正は「長捷」に作る。
6 「十」、大正は「十一」に作る。
7 「明」、大正は「朋」、元本は「明」、明本は「時」、宮本は「門」に作る。
8 「不」、原文になし。大正により加える。
9 「謂」、原文は「詣」に作る。大正により改める。
10 「齊」、原文は「濟」に作る。大正により改める。
11 「拔萃」、原文は「狀花」に作る。大正により改める。
12 「惠」、大正は「慧」に作る。以下同じ。
13 「和」、大正は「弘」、宋本・宮本は「和」に作る。
14 「五」、大正は以下「與兄住淨土寺」の六文字を加える。宮本はこの六文字なし。
15 「兵」、原文は「丘」に作る。大正により改める。
16 「投」、原文は「役」に作る。大正により改める。
17 「倫」、原文は「僧」に作る。大正により改める。
18 「四」、大正は「胸」に作る。宮本は「四」に作る。
19 「訝」、原文は「訶」に作る。大正により改める。

也。席中聽侶、僉號英雄。四方多¹⁹〈04-002〉難、總歸綿益、相與稱贊、逸口傳聲。

又僧景攝論、道振迦延、世號難加、人推精覈²⁰。皆師承宗據、隅隅明詮²¹。昔來攝論十二住義、中表銷釋十有²²二家、講次誦持、率多昏漠。而契初聞記錄、片無差舛、登坐叙引、曾不再緣。須便爲述、契逾宿構。如斯甚衆、不可殫言²³。

武德五年、二十有一、爲諸學府、雄伯沙門、講揚心論、不窺文相、而誦注無窮。時目神人。不神何能此也。

晚與兄俱住益南空惠寺。私自惟曰。學貴經遠、義重疎通。鑽仰一方、未成採蹟。有沙門道深。體悟成實、學稱包富、控權敷化、振納趙郡。憤發內心、將損巴蜀。捷深知其遠量也、情顧勤勤、每勸勉之、而正意已行、誓無返面。遂乃假緣告別、間行江碛、經途所及。荊揚等州、訪逮道隣、莫知歸詣。便北達深所、委參勇鎧。素龍嘉問、縱洽無遺。終始十月、資承略盡。時燕趙學侶、相顧逢秋。後發前至、抑斯也²⁷。

沙門惠休。道聲高邈、行解相當²⁹、夸罩古今³⁰。獨據鄴中、昌言傳授、詞鋒所指、海內高尚。又往從焉。不面生來、相逢若舊。去師資禮、事等法明。偏爲獨講難心攝論、指摘纖隱、曲示綱猷。相續八月、領酬無厭。休又驚異絕嘆、撫掌而嗟曰、希世若人、爾其是也。

沙門道岳。宗師俱全、闡弘有部。包籠領袖、吞納喉襟。揚業帝城、來儀群學。乃又從焉。創迹京都、詮途義苑³²。

沙門法常、一時之最。經綸教悟、其從如林。契乃一舉十問、皆陳幽奧、坐中杞梓、拔思未聞。由是馳譽追流、檀聲日下。

沙門僧辯、法輪論士。機惠³⁵〈04-003〉是長、命來連坐、吾之徒也。但爲俱舍一

- | | |
|----|-------------------------------|
| 19 | 「多」、原文は「多多」に作る。衍字とみて改める。 |
| 20 | 「覈」、大正は「覆」に作る。三本・宮本は「覈」に作る。 |
| 21 | 「陳」、三本・宮本は「奥」に作る。 |
| 22 | 「詮」、原文は「鈴」に作る。大正により改める。 |
| 23 | 「殫」、原文は「彈」に作る。大正により改める。 |
| 24 | 「控」、原文は難説。大正により補う。 |
| 25 | 「郡」、大正は「邦」に作る。 |
| 26 | 「巴」、原文は「巳」に作る。大正により改める。 |
| 27 | 「斯」、大正は「斯人」に作る。 |
| 28 | 「惠」、大正は「慧」に作る。 |
| 29 | 「當」、原文・大正は「富」に作る。三本・宮本により改める。 |
| 30 | 「罩」、原文は難説。大正により補う。 |
| 31 | 「掌」、原文は「常」に作る。大正により改める。 |
| 32 | 「詮」、原文は「詒」に作る。大正により改める。 |
| 33 | 「法」、原文は「法々」に作る。大正により改める。 |
| 34 | 「杞」、大正は「杞」に作る。 |
| 35 | 「辯」、原文は「解」に作る。大正により改める。 |

論、昔所未聞、因爾伏膺、曉夕諮請。岳審其殷至、惠悟霞明、樂說不窮、任其索隱。覃思研採、啐周究竟。

沙門玄會、匠剖涅槃、刪補舊疏、更張琴瑟。承斯令問、親位席端、諮質遲疑、渙然祛滯。

〔西域を行く〕

僕射宋公蕭瑀、敬其脫穎、奏住莊嚴。然非本志、情栖物表。乃又惟曰。余周流吳蜀、爰逮趙魏、末及周秦、預有講筵、率皆登踐。已布之言令、雖蘊胸襟、未吐出之詞宗、解籤無地。若不輕生殉命、誓往華胥、何能具觀成言、用通神解。一觀明法了義真文、要返東華傳揚聖化、則先賢高勝、豈決疑於彌勒、後進鋒穎、寧輟想於瑜伽邪。

時年二十九也。遂厲然獨舉、詣闕陳表、有司不爲通引。頓迹京臯、廣就諸蕃、遍學書語。行坐尋授、數日傳通。側席面西、思聞機候。會貞觀三年、時遭霜儉、下勅道俗、逐豐四出。幸因斯際、徑往姑臧、漸至燉煌。路由天塞、裏粮弔影。前望悠然、但見平沙、絕無人徑、迴遑委命、任業而前。

展轉因循達高昌境。初奘在涼州、講楊經論。華夷士庶、盛集歸宗。商客通傳、預聞蕃域。高昌王麴文泰、得信佛經。復承奘告將遊西鄙、恒置印駟、境次相迎。勿聞行達、通夕立候。王母妃屬、執炬殿前。見奘苦辛備言意故、合宮下淚驚異希有。延留夏坐、長請開弘。王命爲弟、母命爲子。珠禮厚供、日時恒致。乃爲講仁王等經、及諸機教。道俗係戀、並願長留。奘曰。本欲通開大化、遠被家國、不辭賤命、忍死西奔。若如來語一滯此方、非唯自虧發足、亦恐都爲法障。乃不食

36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60

〔覃、大正は「單」に作る。
〔渙、原文・宮本は「淡」に作る。大正は「煥」に作る。三本により改める。
〔僕、原文は「樊」に作る。大正により改める。蕭瑀、原文は難読。大正により補う。
〔穎、原文は「類」に作る。大正により改める。出、大正になし。
〔邪、大正は「耶」に作る。
〔厲、原文は「厲」に作る。大正により改める。京臯、原文は「臯」に作る。大正により改める。
〔傳、大正は「便」に作る。三本・宮本は「傳」に作る。
〔貞、原文は「眞」に作る。大正により改める。逐、原文になし。大正により加える。
〔塞、原文は難読。大正により補う。
〔循、原文は「脩」に作る。大正により改める。華、原文は「花」に作る。大正により改める。宗、大正は「崇」に作る。宮本は「宗」に作る。
〔客、原文は「容」に作る。大正により改める。得、大正は「特」に作る。三本・宮本は「得」に作る。
〔樊、原文は「樊樊」に作る。衍字とみて改める。
〔駟、原文は「駟」に作る。大正により改める。屬、原文は「厲」に作る。大正により改める。虧、原文は「戲」に作る。大正により改める。都、原文は「覩」に作る。大正により改める。食、原文になし。大正により加える。
〔東、原文は「末」に作る。大正により改める。

〔04—004〕三日。僉見極意、無敢措言。王母曰。今與法師一遇、並是往業因緣。脫得果心東返、願重垂誠誥。遂與契手傳香信、誓爲母子。魏氏流淚、執足而別。仍勅殿中侍郎、齎綾帛五百疋、書二十四封、并給從騎六十人、送至突厥葉護牙所。以大雪山北六十餘國、皆其部統故、重遣達契、開前路也。

初至牙所。信物倍多、異於恒度。謂是親弟。具以情告、終所不信。可汗重其賄賂、遣騎前告所部諸國。但有名僧勝地、必令契到。於是連騎數十、盛若皇華。中途經國、道次參候、供給頓具、倍勝於初。

自高昌至於鐵門、凡一十六國。人物優劣、奉信淳疎、具諸國傳。

其鐵門也、卽鐵門關、漢之西屏。入山五百、旁無異路。一道南出、險絕人物。左右石壁、竦立千仞。色相如鐵。故因號焉。見漢門扉、一豎、一臥。外鐵、裏木、加懸諸鈴。必掩此關、寔惟天固。

南出斯門、土田溫沃、花果榮茂。地名覲貨羅也。縱千餘里、廣三千餘。東拒葱嶺、西接波斯、南大雪山、北據鐵門。縛芻大河、中境西流。卽經所謂博叉河也。其境自分、爲二十七國。各有君長、信重佛教。僧以十二月十六日、安居坐其春分。以斯時溫熱雨多故也。

又前經國凡度十三、至縛喝國。土地華博。時俗號爲小王舍城。國近葉護南牙也。突厥常法、夏居北野。花草繁茂、放牧爲勝。冬處山中、用遮寒厲。故有兩牙王都。城外西南寺中、有佛澡罐可容斗許、及佛掃帚、并以佛牙。守護莊嚴、殆難瞻觀。契爲國使、躬事頂戴。西北不遠、有提謂波利兩城。建塔表靈。卽爰初〔04—005〕道成、獻麴長者之本也。髮瓜塔也。

又東南行大雪山中七百餘里、至梵衛國。僧有數千、學出世部。王城北山有立石

86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61
〔誠、原文は「誠」に作る。大正により改める。〕	〔書、原文は「二百」に作る。大正により改める。〕	〔從、原文は「徒」に作る。大正により改める。〕	〔葉、原文は「業」に作る。大正により改める。〕	〔護、原文は「護」に作る。大正により改める。〕	〔終、原文は「終」に作る。大正により改める。〕	〔到、原文は「列」に作る。大正により改める。〕	〔華、原文は「花」に作る。大正により改める。〕	〔凡、原文は「凡經」に作る。大正により改める。〕	〔淳、原文は「淳」に作る。大正により改める。〕	〔國、原文は「國」に作る。大正により改める。〕	〔關、原文は「關」に作る。大正により改める。〕	〔左、原文は「太左」に作る。大正により改める。〕	〔左右、原文は「左右」に作る。大正により改める。〕	〔石、原文は「古石」に作る。大正により改める。〕	〔竦、原文は「竦」に作る。大正により改める。〕	〔大、原文は「大」に作る。大正により改める。〕	〔三、原文は「三」に作る。大正により改める。〕	〔土、原文は「土」に作る。大正により改める。〕	〔果、原文は「果」に作る。大正により改める。〕	〔縱、原文は「縱」に作る。大正により改める。〕	〔拒、原文は「拒」に作る。大正により改める。〕	〔温、原文は「温」に作る。大正により改める。〕	〔喝、原文は「喝」に作る。大正により改める。〕	〔遮、原文は「遮」に作る。大正により改める。〕	〔罐、原文は「罐」に作る。大正により改める。〕

像。百五十尺。城東臥佛。長千餘尺。並精舍重接。金寶莊校、晃曜人目。見者稱嘆。又有佛齒舍利、劫初緣覺齒長五寸許、金輪王齒長三寸許、并商那和修鉢、及九條衣絳色猶存。

又東山行、至迦畢試國。⁹¹奉信彌勝。僧有六千。多大乘學。其王歲造銀像舉高丈八、延請遐邇、廣樹名檀。國有如來爲菩薩時齒。長可寸餘。又有其髮。引長尺餘、放還螺旋。自斯地北、民雜胡戎。制服威儀、不參大夏、名爲邊國。蜜利車類。唐言譯之垢濁種也。

〔北インドを行く〕

又東南七百、至濫波國。即印度之北境矣。言印度者、即天竺之正名。猶身毒賢豆、之訛號耳。論其境也、北背雪山、三陲大海。⁹⁵地形南狹、如月上弦。川平廣衍、周九萬里。七千餘國、依止其中。時或乖分、略地爲國。今則盡三海際、同一王命。

又東雪山、至那伽羅曷國。⁹⁶即布髮掩泥之故地也。詳諸經相、意有疑焉。何則計尋本事、乃在賢劫已前、蓮華定光名殊。三佛既非同劫、頻被火災。何得故處、今猶泥濕。若以爲虛、佛非妄語。如彼諸師、各陳異解。有論者言。此實本地。佛非妄也。雖經劫壞、本空之處、願力莊嚴、如因事也。並是如來流化。斯迹常在、不足怪矣。故其勝地。

左則標樹諸窠觀波。即靈塔之正名。猶偷婆斗薺婆、之訛號耳。阿育王者、此號無憂。恨不覩佛、興諸感戀、經（04-006）是聖迹、皆起銘記。故於此處、爲建石塔、高三十餘丈。又有石壁佛影、蹈迹衆相。皆豎標記、並如前也。

103

「經」、大正は「桂」に作る。三本・宮本は「繼」に作る。

102 101 100 99

「定」、原文は難読。大正により補う。
「實」、原文は「賢」に作る。大正により改める。
「壞」、原文は「懷」に作る。大正により改める。
「怪」、原文は「怪」に作る。大正により改める。

98 97 96

「計尋」、大正は「討尋」に作る。明本は「尋討」に作る。
「曷」、原文は「昌」に作る。大正により改める。
「至」、原文になし。大正により加える。

95 94

「雪」、原文は「靈」に作る。大正により改める。
「陲」、原文は難読。大正により補う。三本・宮本は「垂」に作る。

93 92 91

「迦」、原文は「遊」に作る。大正により改める。
「銀」、原文は「録」に作る。大正により改める。
「遐」、原文は「迫」に作る。大正により改める。

90 89

「鉢」、原本は「鉢」に作る。以下同じ。

88 87

「帶」、原文は「尋」に作る。大正により改める。
「表靈」、大正は「凌虛」に作る。三本・宮本は「表靈」に作る。

城南不遠鹽羅城¹⁰⁴、有頂佛骨。周尺二寸。其相仰平、形如天蓋。佛髑髏蓋。如荷葉盤。佛眼圓晴、狀如奈許、澄淨皎然。有佛大衣。其色黃赤。佛之錫杖。以鐵爲環、紫檀爲筓。此五聖迹、同在一城。固守之務、如傳國寶。北近突厥、昔經侵奪、雖至所在、還潛本處。斯則赴緣隱顯、未在兵威。

樊奉觀靈相、悲淚橫流。手撥末香、親看體狀、倍增欣悅。卽以和香、印其頂骨。觀有嘉瑞、又增悲慶。近有北狀大月支王、欲知來報、以香取相。乃示馬形、甚非所望。加諸布施、積功懺悔。又以香取、現師子形。雖位狩王、終爲畜類。情倍歸依、又以加施戒。乃現人天、方還本國。

故其俗法、見五相者、相一金錢¹⁰⁷。取其相者、酬七金錢。俗利其寶、用充福物。既非僧掌、固守彌崇。無論道俗、必先酬價。被樊王命、觀視具周。旁國諸僧、承斯榮望、同來禮謁。

又東山行、至健駄羅國。佛寺千餘。民皆雜信。城中素有鉢廟、衆事莊嚴。昔如來鉢、經於此廟、乃數百年。今移波斯王宮供養。

城東有迦膩王大塔。基周里半。佛骨舍利一斛在中。舉高五百餘尺。相輪上下二十五重。天火三災、今正營構。卽世中所謂雀離浮圖是也。元魏靈太后胡氏、奉信情深、遣沙門道生等、齋大廡長七百餘尺、往彼掛之、脚財及地、卽斯塔也。亦不測雀離名生所由。

左側諸迹。其相極多。近（04-007）則世親如意造論之地。遠則捨於千眼、睽奉二親、檀特名山、達拏本迹、仙爲女亂、佛鬼化母、並在其境。皆無愛王、爲建石塔。高者數百餘尺。立標記焉。

自北山行、達烏長那國。卽世中所謂北天竺烏長國也。其境周輪¹¹⁷、五千餘里。果

104 「城」、大正は「城中」に作る。

105 「樊」、原文は「壯」に作る。大正により改める。
106 「撥」、原文は「揆」に作る。大正により改める。

107 「以」、大正になし。

108 「具」、原文は「其」に作る。大正により改める。

109 「利」、原文は「利骨舍利」に作る。衍字とみて改める。

110 「世」、原文は「在」に作る。大正により改める。

111 「元」、原文は「無」に作る。大正により改める。

112 「旛」、大正は「幡」に作る。

113 「財」、大正は「纔」に作る。

114 「北」、原文になし。大正により加える。

115 「達烏」、原文は「遠焉」に作る。大正により改める。

116 「烏」、原文は「焉」に作る。大正により改める。
117 「輪」、大正は「圍」に作る。三本・宮本は「輪」に作る。

實充備、爲諸國重。¹¹⁸傳云。卽昔輪王之苑園也。僧有萬餘、兼大乘學。王都四周、多諸古迹。忍仙、佛跡、半偈、避讎、¹¹⁹析骨書經、割肉代鴿、蛇藥護命、血飲夜叉、如斯等相、備列其境。各具瞻奉、情倍欣欣。

城之東北減三百里、大山龍泉。名阿波邏。卽信度河之本源。¹²⁰西南而流。經中所謂辛頭河也。王都東南、越山逆河、鐵橋棧道、路極懸險、千有餘里、至極大川。卽古烏仗之王都也。中有木慈氏像。高百餘尺。卽末田地羅漢、將諸工人、三返上天、方得成者。身相端嚴、特難陳說。

還返烏仗、南至呬叉始羅國。¹²¹具見伊羅鉢龍所住之他。月光、決因之地。育王標塔。舉高十丈。北有石門。殊極高大。崇竦重山。道由中過。¹²²斯又薩埵捨身處也。

自此東南、山行險阻。經一小國、度數鐵橋、減二千里、至迦濕彌羅國。卽此俗常傳罽賓是也。莫委罽賓由何而生。觀其圖域、同罽賓耳。¹²³本是龍海。羅漢取之、引衆而住、通三藏也。故其國境、四面負山。周七千餘里、門徑狹窄。僧徒五千、多學小乘。國有大德。名僧勝。¹²⁴契就學俱舍順正理因明聲明及大毘婆沙。王愍遠至、給書手十人、供給寫之。有佛牙。長可寸餘、光白如雪。自濫波至此繞山諸國、形體鄙薄、俗習胡蕃。雖預五方、非印（04-008）度之正境也。以住居山谷、風雜諸邊。

自此南下、通望無山。將及千里、至磤迦國。土據平川。周萬餘里。兩河分注、卉木繁。

〔中インドを行く〕
漸次東南、路經六國、多有道迹。¹³⁴亦育王標塔。高二十丈者、其數不少。中有末

118 「國」、大正は「國所」に作る。三本・宮本は「國」に作る。

119 「讎」、原文は「讎」に作る。大正により改める。

120 「書」、原文は「書」に作る。大正により改める。

121 「減」、原文は「盛」に作る。大正により改める。

122 「本」、原文は「大」に作る。大正により改める。

123 「烏仗」、原文は「焉伏」に作る。大正により改める。

124 註123に同じ。

125 「竦」、原文は「練」に作る。大正により改める。

126 「過」、原文は「遇」に作る。大正により改める。

127 「圖域」、原文は「固城」に作る。大正により改める。

128 「迕」、原文は「近」に作る。大正により改める。

129 「勝」、大正は「勝匠」に作る。三本・宮本は「勝」に作る。

130 「順」、原文は「乃王」に作る。大正により改める。

131 「至」、原文は「乃王」に作る。大正により改める。

132 「繞」、原文・三本・宮本は「統」に作る。大正により改める。

133 「住」、原文は「徑」に作る。大正により改める。

134 「亦」、大正になし。

菟羅國。最饒蹤緒。城東六里、有一山寺。昔烏波毬多。唐言近護。卽五師之一也。是其本住所建。¹³⁵北巖石室。高一丈餘、廣三十步。其側不遠、復有獼猴隨坑處、四佛經行處、賢聖依住處。靈相衆矣。

又東南行、經于七國、至劫比他國。¹³⁶俗事大自在天。其精舍者、高百餘尺。中有天根、形極偉大。謂諸有趣、由之而生。王民同敬、不爲鄙恥。諸國天祠、率置此形。大都異道、乃有百數。中所高者、自在爲多。

有一大寺。五百僧徒。淨人僕隸、乃有數萬。皆宅其寺側。中有三道階。南北而列。¹³⁹卽佛爲母切利安居、夏竟下天、帝釋之所作也。寶階本基、論沒並盡。¹⁴⁰後王傲之在其故地。猶高七十餘尺。育王、爲建石柱。高七尺餘。光淨明照、隨人罪福、影現其中。旁有賢劫四佛經行石基。長五十許步、高于七尺。足蹈所及、皆有蓮華文生焉。

國西北不遠二百許里、至羯若鞠闍國。唐言曲女城也。王都臨菟伽河。卽洹河之正名矣。源從北來、出大雪山。其土邪正雜敬、僧徒盈萬。多諸聖迹。四佛行坐、七日說法處、佛牙髮爪等塔。精舍千餘。名寺異相、多臨河北。¹⁴³契於此國、學佛使日胄二毘婆娑、於毘耶犀那所、經于三月。

此王號戒日。正法治世、將五十載。言戒日者、諡法之名。此方薨後、量德以贈。彼土初¹⁴⁵（041009）登、卽先薦號。以滅後美之虛名耳。¹⁴⁹今猶御世、統五印度。

初治邊陲爲小國也。先有室商佉王。威行海內、酷虐無道。劉殘釋種、拔菩提樹、絕其根苗。選簡名德三百餘人留之、餘者並充奴隸。¹⁵²戒日、深知樹於禍始也、與諸官屬至菩提坑、立大誓曰。若我有福統臨海內、必崇建佛法。願菩提樹從地而生。言也尋視、見菩提萌坑中上踊。遂迴兵馬、往商佉所、威福力故、當卽除滅。所以

135 「勉」、原文は難説。大正により補う。

136 「他」、原文になし。大正により加える。

137 「根」、大正は「貌」に作る。三本・宮本は「根」に作る。

138 「其」、原文は「有」に作る。大正により改める。
139 「列」、原文は「烈」に作る。大正により改める。
140 「並」、原文になし。大正により加える。
141 「其」、原文になし。大正により加える。
142 「華」、原文は「花」に作る。大正により改める。

143 「契」、原文は難説。大正により補う。

144 「那」、大正は「那三藏」に作る。
145 「此」、原文は「比」に作る。文義により改める。大正になし。

146 「諡」、原文は「論」に作る。大正により改める。
147 「方」、原文は「号」に作る。大正により改める。
148 「薦」、原文は難説。大正により補う。

149 「虚」、原文は「唐」に作る。大正により改める。
150 「虐」、原文は「虚」に作る。大正により改める。
151 「劉」、原文は「創」に作る。大正により改める。
152 「奴隸」、原文は「如疑」に作る。大正により改める。

153 「必」、大正は「必能」に作る。

抱信誠篤、倍發由來、還統五方。象兵八萬、軍威所及、並藉其力。

素不血食、化境有羊、皆贖施僧、用供乳酪。五年一施、傾其帑藏。藏盡還蓄、

時至復行。用此爲常。有犯王法、乃至叛逆、罪應死者、遠斥邊裔。餘者懲罰、蓋不足言。故諸國中、多行盜竊。非假伴援、不可妄進。

又東南行二千餘里、經于四國、達僑儼彌。外道殷盛。王都城中、有佛精舍。高六十尺。中有檀像。即昔優田大王造之。置在天之影也。其側龍窟、聖迹多矣。

又東北千餘里、至室羅伐悉底國。即舍衛國、舍婆提之正名也。周睇荒毀、財有

故基。斯匿治宮、須達故宅、趾墟存焉。城南五里、有逝多林。即祇陀園也。勝軍大臣善施所造。全寺頽滅、尚有石柱。舉高七丈。育王標樹邊、有埤室一區。中安

如來爲母說法像。自餘院宇、湮沒蕩盡。但有佛洗病比丘處、目連舉身子衣處、佛

僧常汲故井處、外道陰謗殺姪女處、佛異論處、身子拊處、瑠璃沒處、得眼林處、

迦葉彼佛本生地。諸如上處、皆建石塔。並無憂王之所造也。寺東不遠、三大深坑。

即達調、瞿波、戰（04-010）遮女人、所沒之處。坑於極邊、臨望無底。自古及今、

大雨洪注、終無溢滿。

又東將七百里、至劫毘羅代宰堵國。即毘羅衛、淨飯王所治之都也。空城十餘、

無人栖住。故宮輒城、周十五里。荒寺千餘。惟宮中一所在焉。王寢殿基上有銘塔。

即如來降神之處也。彼有說云、五月八日神來降者。上坐部云、十五日者。與此方

述、微復不同。豈有異邪。至如東夏所尚素王爲聖、將定年算前達尚迷。況復曆有

三代、述時紀號猶自差舛。顧惟理越情求、赴機應感。皆乘權道、適變爲先。豈以

常人之耳目、明通於至極也。

城之南北有過去二佛生地諸塔。育王石柱、銘記甚多。都城西北數百千塔、並是

174	173	172	171	170	169	168	167	166	165	164	163	162	161	160	159	158	157	156	155	154
「明」、	「感」、	「顧」、	「外」、	「自」、	「算」、	「也」、	「洪」、	「於極」、	「陰」、	「子」、	「博」、	「大」、	「財」、	「國」、	「置」、	「懲」、	「斥」、	「犯」、	「五」、	「信」、
大正は「用」に作る。	原文は「威」に作る。大正により改める。	原文は「領」に作る。大正により改める。	原文は「殊」に作る。大正により改める。	原文は「自著」に作る。「著」を衍字とみて改める。	原文は「等」に作る。大正により改める。	原文は「也室」に作る。「室」を衍字とみて改める。	原文は「供」に作る。大正により改める。	大正は「極深」に作る。	原文は「張」に作る。大正により改める。	原文は「于」に作る。大正により改める。	原文は「博」に作る。大正により改める。	大正は「王」に作る。	大正は「纔」に作る。	大正は「穢」に作る。	大正は「做」に作る。三本・宮本は「置」に作る。	大正により改める。	元本・宮本は「徴」に作る。	原文は「行」に作る。大正により改める。	原文は「化」に作る。大正により改める。	原文は「言」に作る。大正により改める。

瑠璃所誅諸釋。既是聖者¹⁷⁵、後人爲造。當斯時也、有四釋子。忿其見逼、不思犯戒、出外拒軍。瑠璃遂退。後還本國、城中不受、告曰、吾爲法種、誓不行師。汝退彼軍。非吾族也。既被放斥、遠投諸國。本是聖胤、競宗樹之。今烏仗梵衍等王、並其後也。

城東百里、卽是如來生地之林。今尚存焉。或有說者、三月八日。上坐部云、十五日也。此土諸經、咸云、四月八日。斯非感見之機、異計多耳。

又東七百里、方至拘尸¹⁸⁴。中途諸異、略不復紀。創達此城、不覺五情失守、崩踊蹙地。頃之顧眄、但見荒城頽穢、純陀宅基有標誌耳。

西北四里、河之西岸、卽娑羅大林。周匝輪徑、三十餘里。中央高竦、卽涅槃地。有一輓室。臥像北首。旁施塔柱、具書銘記。而諸說混淆、通列其上。有云、二月十五日入涅槃者。或云、九月八日入涅槃者。〔04-011〕或云、自彼至今過千五百

年者。或云、過九百年者。城北度河、卽焚身地。方二里餘。深三丈許。土尚黃黑、狀同焦炭。諸國有病、服其土者、無不除愈。故其焚處、致有坑耳。其側復有現足、分身、雉鹿諸塔。並具瞻已。

又西南行大深林中七百餘里、達婆羅痾斯國。卽常所謂波羅奈也。城臨苑伽。外道殷盛、乃出萬計。天寺百餘。多遵自在。僧徒三千。並小乘正量部也。王都東北、彼羅奈河之西、塔柱雙建。育王所立。影現佛像、觀者興敬。

度河十里、卽鹿野寺也。周閭重閣、望若仙宮。僧減二千。皆同前部。佛事高勝、諸國最矣。中有轉法輪像。狀如言說。旁樹石柱。高七十餘尺。內影外現、衆相備矣。斯卽如來初轉法處。其側復有五百獨覺塔、三佛行坐處。寺中銘塔靈迹極多。

198	197	196	195	194	193	192	191	190	189	188	187	186	185	184	183	182	181	180	179	178	177	176	175
「瑠璃」、原文は「瑠々」に作る。三本・宮本により改める。大正は「流」に作る。	「聖」、原文は「聖城西北」に作る。「城西北」を衍字とみて改める。	「後」、原文になし。大正により加える。	「吾」、原文は「五」に作る。大正により改める。註178に同じ。	「投」、原文は「授」に作る。大正により改める。大正は「木」に作る。	「烏仗」、原文は「焉伏」に作る。大正により改める。	「非」、原文・三本は「亦」に作る。大正により改める。	「百」、原文・三本・宮本になし。大正により改める。	「娑」、原文は「安」に作る。大正により改める。	「徑」、原文は「經」に作る。大正により改める。	「三」、大正は「四」に作る。三本・宮本は「三」に作る。	「像」、原文は「象」に作る。大正により改める。以下同じ。	「湊」、原文は「循」に作る。大正により改める。	「列」、原文は「烈」に作る。大正により改める。	「或」、原文は「惑」に作る。大正により改める。註191に同じ。	「文」、原文は「大」に作る。大正により改める。	「土」、原文は「上」に作る。大正により改める。	「坑」、原文は「坳」に作る。大正により改める。	「疵」、原文は「疚」に作る。大正により改める。	「都」、原文は「覩」に作る。大正により改める。				

乃有數百。又有佛所浴池、浣衣洗器之水。皆有龍護。曝衣方石、鹿王迎佛之地。並建石塔。動高三百餘尺。相甚弘偉。故略陳耳。

順河東下、減於千里、達吠舍釐。即毘舍離也。露形異術、偏所豐足。國城舊基、周七十里。人物寡鮮、但爲名地。其中說淨名經處。寶積淨名諸故宅處、身子證果處、姨母減度處、七百結集處、阿難分身處、此之五處、各建勝塔、標示後代。

自斯東北二千餘里、入大雪山、至尼波羅國。純信於佛。僧有二千。大小兼學。城東有池。中有天金、光浮水上。古老傳云、彌勒下生、用爲首飾。或有利其寶者、夜往盜之、但見火聚騰焰、都不可近。今則沈深巨窮其底。水又極（04-012）熱、難得措足。唐國使者、試火投之、焰便踊起。因用煮米、便得成飯。

其境北界、即東女國與吐蕃接。比來國命往還率由此地。約指爲語。唐梵相去一萬餘里、自古迴遘、致途遠阻。

〔摩伽陀國〕

又從梵吠舍南濟宛河、達摩伽陀國。摩竭提之正號也。其國所居是爲中印度矣。今王祖胤繼接無憂。無憂即頻毘娑羅之曾孫也。王即戒日之女婿矣。今所治城非古所築。宛伽南岸有波吒釐城。周七十里。即經所謂華氏城也。王宮多花。故因名焉。昔阿育王、自新王舍遷都於此。左側聖所、其量彌繁。

城之西南四百餘里、度尼連禪河、至伽耶城。人物希少、可千餘家。又行六里有伽耶山。自古諸王所登封也。故此一山、世稱名地。如來應俗、就斯成道。頂有石塔。高百餘尺。即寶雲等經所說之處。周迴四十里。內聖迹充滿。山之西南、即道成處。有金剛坐。周百餘步。其地則今所謂菩提寺是也。寺南有菩提樹。高五丈許。

- 199 「浴」、原文は「給」に作る。大正により改める。
「毘」、原文は「略」に作る。大正により改める。
「寡」、原文は「宣」に作る。大正により改める。
「處」、原文はなし。大正により加える。
「代」、原文は「伐」に作る。大正により改める。
「或」、原文は「惑」に作る。大正により改める。
「聚」、原文は「衆」に作る。大正により改める。
「試」、原文は「誡」に作る。大正により改める。
「便」、原文は「使」に作る。大正により改める。
「米」、原文は「來」に作る。大正により改める。
「北」、原文は「比」に作る。大正により改める。
「接」、大正は「接境」に作る。
「約」、原文は「紉」に作る。大正により改める。
「語」、原文は「諸」に作る。大正により改める。
「遘」、原文は「適」に作る。大正により改める。
「國」、大正は「國即」に作る。
「無憂」、原文は「無々・憂々」に作る。
大正により改める。
「華」、原文は「花」に作る。大正により改める。
「新」、原文・大正は「離」に作る。三本・宮本により改める。
「封」、原文は「對」に作る。大正により改める。
「西」、原文は「面」に作る。大正により改める。
「金」、原文は「餘」に作る。大正により改める。
「餘」、大正は「許」に作る。
「或」、原文は「惑」に作る。大正により改める。
「月」、原文はなし。大正により加える。
「恒北」、原文は「恒比」に作る。大正により改める。
「倍」、原文は「搭」に作る。大正により改める。

遶樹周垣、壘輒爲之。輪迴五百餘步。東門對河、北門通寺。院中靈塔、相狀多矣。如來得道之日、互說不同。或云三月八日、及十五日者。

垣北門外大菩提寺。六院三層。牆高四丈。皆輒爲之。師子國王、買取此處、興造斯寺。僧徒僅千。大乘上坐部所住持也。有骨舍利。狀人指節。肉舍利者、大如眞珠。彼土十二月三十日、當此方正月十五日。世稱大神變月。若至其夕、必放光瑞、天雨香花、充滿樹院。

樊初到此、不覺悶絕。良久蘇醒、歷觀靈相。昔聞經說、今宛目前。恨居邊鄙、生在末世、不見眞容、倍225〈04-013〉復悶絕。旁有梵僧。就地接撫、相與悲慰。雖備禮謁、恨無光瑞。

停止安居、迄於解坐。彼土常法。至於此時、道俗千萬。七日七夜、競伸供養。凡有兩意。謂觀光相及希樹葉。每年樹葉、恰226至夏末、一時飛下。通夕新抽、與故齊等。

時有大乘居士。爲樊開釋瑜伽師地。爾夜對講、忽失燈明。又觀所佩珠璫瓔珞、不見光彩。229但有通明晃朗、內外洞然。而不測其由也。怪斯所以、共出草廬。望菩提樹、乃見有僧。手擎舍利。大如人指。在樹其上、遍示大眾。所放光明、照燭天地。于時衆闐、但得遙禮。雖目觀瑞、心疑其火。合掌虔跪、乃至明晨。心漸萎頓、光亦歇滅。居士問曰。既觀靈瑞。心無疑邪。樊具陳意。居士曰。余之昔疑、還同此也。其瑞既現、疑自通耳。

余見菩提樹、葉如此白楊。具以問之。樊曰。相狀略同、扶疎茂盛、少有異也。於此寺東、望屈屈吒播陀山。卽經所謂鷄足山也。直上三峰、狀如鷄足。因取號焉。去菩提寺一百里。頂樹大塔、夜放神炬、光明通照。卽大迦葉波寂定所也。路

248 247 246 245 244 243 242 241 240 239 238 237 236 235 234 233 232 231 230 229 228 227 226

「土」、原文は「土」に作る。大正により改める。
「伸」、原文は「申」に作る。大正により改める。
「相」、原文・三本・宮本になし。大正により加える。
「恰」、原文は「拾」に作る。大正により改める。
「彩」、原文・大正は「采」に作る。三本・宮本により改める。
「洞」、原文は「綱」に作る。大正により改める。
「由」、原文は「由由」に作る。衍字とみて改める。
「怪」、原文は「怪（怪の異体字）」に作る。大正により改める。
「雖目」、原文は「日雖」に作る。大正により改める。
「掌」、原文は「常」に作る。大正により改める。
「同」、大正は「同而」に作る。
「扶」、原文は「狀」に作る。大正により改める。
「炬」、原文は「炬」に作る。大正により改める。
「澁」、原文は「澁（澁の異体字）」に作る。大正により改める。
「蒙」、原文は「象」に作る。大正により改める。
「聞」、原文になし。大正により加える。
「萬」、原文は「方」に作る。大正により改める。
「佛」、原文になし。大正により加える。
「伐」、大正は「代」に作る。三本・宮本は「伐」に作る。
「夏坐」、大正は「坐夏」に作る。
「壘」、原文は「壘（岩の異体字）」に作る。大正により改める。
「娑」、原文は「沙」に作る。大正により改める。
「奢」、原文は「夸」に作る。大正により改める。

極梗²³⁹、多諸林竹。師子虎象、縱橫騰倚。每思登踐、取進無由。奘乃告王請諸防援、蒙給兵三百餘人。各備鋒刃、斬竹通道、日行十里。爾時彼國、聞奘往山、士女大小、數盈十萬、奔隨繼至、共往鷄足。既達山阿、壁立無路。乃縛竹爲梯、相連而上。達山頂者、三千餘人。四睇欣然、轉增喜踊。具觀石罅、敬花供養。

自山東北百有餘里、至佛陀伐那山。有大石室。（04-014）佛曾遊此、天帝就石塗香以供。行至其處、今猶郁烈。不遠山室。可受千人。如來三月於中夏坐、壘石爲道。廣二十步、長五里許。卽頻毘娑羅修觀上山之所由也。

又東六十、便至矩奢揭羅補羅古城。唐言茅城。多出香茅。故因名也。其城卽摩揭陀之正中。經本所謂王舍城者是矣。崇山四周、爲其外郭。上如埤堦、皆輒爲之。西通小徑、北闢山門。廣長從狹、周輪百五十里。其中宮城、周三十餘里。內諸古迹、其量復多。

宮之東北可十五里、有姑栗陀羅矩吒山。卽經所謂耆闍崛山者是也。唐言鷲峯之臺。於諸山中最顯映奪。接山之陽、佛多居住。從下至頂、編石爲階。廣十餘步、長六里許。佛常往來於斯道也。歷〔觀崖岫、備諸古迹。不可勝紀。廣如圖傳。山城〕北門強一里許、卽迦蘭陀竹林精舍石基。東戶輒室、今仍現在。自園西南行六里許、南山之陰大竹林中、有石室焉。卽大迦葉波、與千無學結集經教、所託之地。又西二十餘里、卽大衆部結集處也。山城之北可五里許、至曷羅闍姑利泗城。唐言新王舍也。餘傳所稱者是矣。

〔那爛陀寺で戒賢に學ぶ〕

又北三十餘里、至那爛陀寺。唐言施無厭也。瞻部洲中寺之最者、勿高此矣。五

277 276 275 274 273 272 271 270 269 268 267 266 265 264 263 262 261 260 259 258 257 256 255 254 253 252 251 250 249

「羅」、原文になし。大正により加える。
「茅」、原文は「菲」に作る。大正により改める。
註250に同じ。
「謂」、原文になし。大正により加える。
「埤」、原文は「僻」に作る。大正は「陴」に作る。宋本・明本により改める。
「現」、原文は「倪」に作る。大正により改める。
「量」、原文は「眞」に作る。大正により改める。
「姑」、原文は「始」に作る。大正により改める。
「耆」、原文は「老」に作る。大正により改める。
「住」、原文は「徑」に作る。大正により改める。
以下一七文字、原文になし。
「里」、原文になし。大正により加える。
「壘」、原文は「疊」に作る。大正により改める。
「猶」、原文になし。大正により加える。
以下一六文字、原文になし。
「肅」、原文は難読。大正により補う。
「客」、原文・大正は「容」に作る。三本・宮本により改める。
「至」、大正は「出」に作る。
「迹」、原文は「遠」に作る。大正により改める。
「置」、原文は「量」に作る。大正により改める。
「胃」、原文は難読。大正により補う。
「石」、原文は「后」に作る。大正により改める。
「莊」、大正は「裝」に作る。
「賞」、原文は難読。大正により補う。
「封」、原文は「對」に作る。大正により改める。
「掌」、原文は「常」に作る。大正により改める。
「烏」、原文は「焉」に作る。大正により改める。
「瞻」、原文は「譚」に作る。大正により改める。
「逮」、原文は「建」に作る。文義により改める。

王共造、供給倍隆。故因名焉。其寺都有五院。同一大門、周圍四重、高八丈許。並用甃壘、其最上壁猶厚六尺。外郭三重、牆（亦甃壘）高五丈許。中間水邊、極深池塹。備有花畜、嚴麗可觀。自置已來、防衛清肅。女人非濫、未曾容隱。常住僧衆、四千餘人。外客道俗、通及邪正、乃至萬數。皆周給衣食、（04-015）無有窮竭。故復號寺爲施無厭也。

中有佛院、備諸聖迹。精舍高者、二十餘丈。佛昔於中、四月說法。又有精舍、高三十餘丈。中諸變態、不可名悉。置立銅像、高八丈餘。六層閣盛、莊嚴綺飾。卽戒日之兄、滿胄王造也。又有鑰石精舍。高可八丈。戒日親造。彫莊未備、日役千功。

彼國常法、欽敬德望。有諸論師智識清遠、王給封戶乃至十城、漸降量賞不減三城。其寺現在、受封大德、三百餘人。通經已上、不掌僧役。重愛學問、諮訪異法。故烏耆已西、被於海內、諸出家者、皆多義學。任國往返、都無隔礙。王雖守國、不敢遮障。故彼學徒、博聞該瞻。

率由於此、（*at the beginning of*）契初逮寺、義學有聲。諸有內外、聞皆歸赴。十有八日、豎大論場。邪正翕集、乃有萬數。思欲讎擊、三千餘人、既登無坐。以已舊解、用相抗對、得無殿後。僧衆大悅、各稱慶快、佛法興矣。乃令邊僧權智若此。

又此寺法、通達三藏、員置十人。素來闕一、周訪未獲。以契言問博詣、用充其位。和僧永住、日給上饌二十盤。初感斯供、辭不敢受。僉日、寺法恒爾。客僧初至、觀其解通三藏者、給二十盤。卽二十日。餘者漸減、通一經者、猶須前供五盤五日。過已往自依常限。

時有順世外道。執計四大爲人物因。情議沈密、最難徵覈。承聞此寺、豐諸論士、

278 279 280 281 282 283 284 285 286 287 288 289 290 291 292 293 294 295 296 297 298 299 300 301 302 303 304

「辞」、原文は「辞辞」に作る。衍字とみて改める。

「盤」、原文は「艇」に作る。大正により改める。

「沈密」、原文は「沈蜜」に作る。大正により改める。

「隸」、原文は難読。大正により補う。

「功」、「切」か。

「俱」、原文は「沮」に作る。大正により改める。

「事」、原文は「夷」に作る。文義により改める。

「恕」、原文は「怒」に作る。大正により改める。

「科」、原文は「料」に作る。大正により改める。

「領」、原文は「顔」に作る。文義により改める。

「戒日」、原文は「夫」に作る。大正により改める。

「戒日」、原文は「或曰」に作る。大正により改める。

「月」、「同」か。

「廟」、原文は「廣」に作る。大正により改める。

「吾」、原文は「五」に作る。大正により改める。

「殉」、原文は「徇」に作る。大正により改める。

「土」、原文は「土」に作る。大正により改める。

「涯」、原文は「法」に作る。大正により改める。

「昌」、原文は「曷」に作る。文義により改める。

「八」、原文は「入」に作る。大正により改める。

「跡」、原文は「迹」に作る。

「近」、原文は「斥」に作る。『西域記』卷一〇、

「慈恩伝」卷四により改める。

「兼」、原文は難読。大正により改める。

「多」、原文は「夕」に作る。大正により改める。

「瘴」、原文は「障」に作る。大正により改める。

「將」、原文は「將至」に作る。

「烏荼」、原文は「焉荼」に作る。大正により改

故拘議盡、僧堂戸戸、尅日擊論。彼土常法、諸有寒者、先令乘驢、屎瓶澆頂、公於衆中、形心折伏、然後依隨、（04-016）永充僕隸³³¹。且自義論之設、機變適緣、脱致一差、給身陷辱、衆雖萬數、都無當者。

奘經停既久、薄究其術、心愧通鄙、聖行言對。便告大衆、請與決論。道俗胥悅、遂乃各立旁證、邪正等數。彼既陳理、即施功覈。須臾交辨、通解無路、神理俱喪、溘然伏。預是釋門、一時騰踊。僉命乘驢、將事恥辱。奘曰。我法弘恕、不在形科。情既致領、當授正法。異道稟受、敬奉箴誨。

度脱之後、便往東印度境迦摩縷多國童子王所。以彼風俗、並信異道。故其部衆、乃有數萬。佛法雖弘、未至其土。王事天神、愛重教義。但聞智人、不問邪正、皆一奉敬其人。初染佛法、將弘聖化。故於此國、創開釋曲以事達、王嘆奘勝度。童子初聞、即使迎引。既達相見、宛若親賓。言議接對、又經晦朔。斯國東境、接蜀西蠻、聞之途路、兩月應至。

戒日³³²大王、聞臣告曰、東蕃印度童子王所有、大脂那沙門大乘天者、道德弘遠、彼所奉事。請往致之。其大乘天號、即印度諸僧美奘之目也。戒日既聞、即遣召與俱來、會中印印度。自與宮属百餘萬衆、順河東下、同集摩伽。一與面對、歎然道合。從爾長參正坐、論諸理義、恃月經文。迎還本邑曲女王都、觀其所設五大施。

晚又辭³³³、還施無厭寺。初有論師、名曰戒賢。年將百歲。大小通路、衆共推美。其人即室商王佞之所坑者、爲賊擊出、潛淪草莽。後法重興、開弘經論、道俗（04-017）欽重。戒日增邑十城戸也。諸有科稅、一住戒賢。賢乃以其稅物、成立寺廟³³⁴。

奘初奉謁稟歸、師傳授心。啓請。年雖遲暮、課力敷演瑜伽師地。即十七地也。

- 330 329 「萬」、原文は「百」に作る。大正により改める。
 328 327 「彼」、原文は「待」に作る。大正により改める。
 326 「上」、原文になし。大正により加える。
 325 「現」、大正は「見」に作る。三本・宮本は「現」に作る。
 324 「橋」、原文は「橋」に作る。大正により改める。
 323 「羅」、大正になし。
 322 「境也」、原文になし。大正により加える。
 321 「黑」、原文は「里」に作る。大正により改める。
 320 「猛」、原文は難読。大正により補う。
 319 「寺」、大正は「其寺」に作る。
 318 「彼」、大正は「波」に作る。
 317 「方」、原文になし。大正により加える。
 316 「今」、大正は「令」に作る。
 315 「人固」、原文は「國」に作る。大正により改める。
 314 「有」、原文になし。大正により加える。
 313 「爽」、原文・三本・宮本は「甲」に作る。大正により改める。
 312 「古」、原文は「右」に作る。大正により改める。
 311 「難」、原文になし。大正により加える。
 310 「問」、原文は「十」に作る。大正により改める。
 309 「千」、原文は「十」に作る。大正により改める。
 308 「矩」、原文は「知」に作る。大正により改める。
 307 「繞」、原文は「統」に作る。大正により改める。
 306 「處」、原文は「徑」に作る。大正により改める。
 305 「即」、原文は「即即」に作る。衍字とみて改める。
 304 「號」、大正は「名」に作る。
 303 「刺」、原文は「勅」に作る。大正により改める。

論十有三月、方得一遍。重爲再說、九月方了。論諸餘果。論無暇旁求。此諸邑舉釋宗、繞周大小。故偏所續習。

經於五載、薄知綱領。將行博議、末忍東旋。賢乃誡曰。吾老矣。見子殉命求法、經途十載、方達茲土、不辭朽老、重爲申明。法貴流通、豈期獨善。更參他部、恐失時緣。智無涯也。可還本國。卽爲莊嚴行調、付給經論。契曰。敢聞命矣。

〔東・南・西インドを行く〕

意欲南巡諸國、還途北指。以高昌昔言不得違也。

便爾東行大山林中、至伊爛拏國。見佛坐迹。入石寸許。長五尺二寸、廣二尺一寸。旁有瓶迹。沒石寸許。八出花文、都似新置。有佛立跡。長尺八寸、闊強六寸。又東南行、路經五國、將四千里、至三摩呬吒國。濱近大海。四佛曾遊。見青玉像。舉高八尺。自斯東北、山海之中、凡有六國、卽達林邑。道阻且長、兼多瘴厲。故不遊踐。

又從西行將二千里、達羯羅拏國。邪正兼事。別有三寺。不食乳酪。調達部也。又西南行七百餘里、至烏荼國。東境臨海、有發行城。多有商侶、停於海次。南大海中有僧伽羅國。謂執師子也。相去約指二萬餘里。每夜南望、見彼國中佛牙塔上寶珠光明、騰焰暉赫現於天際。

又西南行。具經諸國、並有異迹。可五十里、至橋薩羅國。卽南印度之正境也。崇信佛法。僧徒萬許。(04-018)其土寬廣、林野相次。王都西南三百餘里有黑蜂山。昔古大王、爲龍猛菩薩造立斯寺。卽龍樹也。寺上下五重。鑿石爲之、引水旋注。多諸變異、沿彼方達。今淨人固守、罕有登者。龕中石像、形極偉大。寺成之

358	357	356	355	354	353	352	351	350	349	348	347	346	345	344	343	342	341	340	339	338	337	336	335	334	333	332	331	
「邪」、大正は「耶」に作る。	「墟」、原文は「靈」に作る。大正により改める。	「雅」、原文は「耶」に作る。大正により改める。	「山」、大正は「出」に作る。大正により改める。	「池」、原文は「絶」に作る。大正により改める。	「西」、原文は「血」に作る。大正により改める。	「邪」、大正は「耶」に作る。大正により改める。	「瞻」、原文は「瞻」に作る。大正により改める。	「之」、大正は「至」に作る。大正により改める。	「山」、原文になし。大正により加える。	「阜」、原文は「帛」に作る。大正により改める。	「都」、大正は「都相」に作る。	「相」、大正になし。	「像」、大正は「象」に作る。三本・宮本は「像」に作る。	「丈」、原文は「大」に作る。大正により改める。	「之」、大正は「象而反錢寶」に作る。	「受」、大正は「象」に作る。	「斛」、原文は「斛」に作る。大正により改める。	「遞」、原文は「通」に作る。大正により改める。	「號」、原文は「號」(號の異体字)に作る。大正により改める。	「號」、原文は「鐘」に作る。大正により改める。	「鑑」、原文は「鑑」に作る。大正により改める。	「堪」、原文は「北」に作る。大正により改める。	「三十」、大正は「八十」に作る。	「祭」、原文は「登」に作る。大正により改める。	「嘖」、大正は「歎」に作る。	「訝」、原文は「訶駭」に作る。大正により改める。	以下三二字、原文になし。	「勇」、原文は「象」に作る。大正により改める。

日、龍猛就山、以藥塗之、變成紫金。世無等者。又有經藏。夾縛無數、古老相傳、盡初結集、並現存在。雖外佛法屢遭誅殄、而此一山住持無改。近有僧來、於彼夏坐。但得讀誦、不許持出。具陳此事。但路幽阻難可尋問。

又復南行七千餘里。路經五國、並有靈迹。至秣羅矩吒國。即瞻部最南、濱海境也。山出龍腦香焉。旁有巖頂清流。繞旋二十許匝、南注大海。中有天宮。觀自在菩薩常所處。即觀世音之正號也。臨海有城。古師子國、今入海中、可三千餘里。非結大伴、則不可至。故不行也。

自此西北四千餘里。中途經國、具諸神異。達摩訶刺他國。其王果勇、威英自在。未賓戒日。寺有百餘。僧徒五千、大小兼學。東境山寺。羅漢所造。有大精舍。〔高百餘尺。中安石像。長八丈許。上施石蓋。凡有七重。虛懸空中、相去各三尺許。禮謁〕見者、無不嘆訝斯神也。

自此因循、廣行諸國、還中印度、抄寫新經。東莊首路、行苑河側、忽被秋賊。須人祭天。同舟三十許人、悉被執縛、唯選契公、堪充食調。結壇河上、置契壇中。初便生饗、將加鼎鑊。當斯時也、取救無緣。注想東夏住持三寶、私發誓曰。餘運未絕、會蒙放免。必其無遇、命也。如何。同舟一時、悲啼號哭。告諸賊曰。此人愍。不辭危難、專心爲法、利益邊垂。君若殺人、（04-019）罪莫大也。寧殺我等、不得損他。衆賊聞之、投刃禮愧。放隨所往、仍舊經論、餘國傳貨。重還本寺、更集經論。

不久之間、戒日聞之、重勅所部、遞送出境。并親青象、以充駄運。契爲形極充大、日別常料、草四十圍、餅食所須、又三斛許、辭以實力、不能勝致。戒日又勅、齊所統境、隨國供擬。非所構者、以諸及之。諸有梵僧、又勸受施。皆曰。斯勝相

386 385 384 383 382 381 380 379 378 377 376 375 374 373 372 371 370 369 368 367 366 365 364 363 362 361 360 359

〔磧〕、原文は「積」に作る。大正により改める。
〔所〕、原文は「口」に作る。大正により改める。
〔斯〕、原文は「斷」に作る。大正により改める。
〔從〕、原文は「徒」に作る。大正により改める。
〔狄〕、原文は「狹」に作る。大正により改める。
〔統〕、原文は「纔」に作る。大正により改める。
〔方〕、原文は「分」に作る。大正により改める。
〔瞻〕、原文は「瞻」に作る。大正により改める。
〔水〕、原文は「水」に作る。大正により改める。
〔險〕、原文は「濂」に作る。大正により改める。
〔至〕、大正は「望」に作る。
〔芻〕、原文は難読。大正により補う。
〔測〕、原文は「側」に作る。大正により改める。
〔邊〕、原文は「達」に作る。大正により改める。
〔池〕、原文は「河」に作る。大正により改める。
〔五〕、原文になし。大正により加える。
〔内〕、原文は「内内」に作る。衍字とみて改める。
〔池〕、原文は「地」に作る。大正により改める。
〔芻〕、原文は難読。大正により補う。
〔已〕、大正は「以」に作る。
〔水〕、大正になし。
〔徙〕、原文は「從」に作る。大正により改める。
〔注〕、原文は「住」に作る。大正により改める。
〔兩〕、大正は「西」に作る。
〔池〕、大正は「河」に作る。三本・宮本は「池」に作る。
〔鳥〕、原文は「象」に作る。大正により改める。
〔升〕、大正は「旣」に作る。三本・宮本は「斗」に作る。
〔甕〕、原文は「雍」に作る。大正により改める。

也。佛滅度來、王雖崇敬、種種布施、未聞以象、用及釋門。象爲國寶。今既見惠、信之極矣。因卽納之。然其象也、其形圓大、高可丈三、長二丈許。上容八人、并諸什物經像等具、並在其上。相狀、如重都、似空行。雖逢奔逸、而安隱不墜、瓶水不側。

〔歸途〕

緣國北旋、出印度境。戒日威被、威象供待。

入牟利國。山川相半、沃壤豐熟。僧徒數萬。並學大乘。

東北山行、過諸城邑、上大雪山。及之其頂、諸山並下。又上三日、達最高嶺。南北通望、但見橫山、各有九重。過斯已往、皆是平地。雖有小山、孤斷不續。唯斯一嶺、曼延高遠。約略爲言、瞻部一洲、山叢斯地。何以知邪。至如西域波斯、平川眇漫。東尋崑崙、莫有窮蹤。北則橫野蕭條。南則印度皐衍。卽經所謂香山者也。達池幽邃、未可尋源。四河所從、皆由斯山。爾雅所謂崑崙之墟、豈非斯邪。案諸禹貢、河出磧石蓋局談其潛出處耳。張騫尋之、乃遊大夏。固是超步所經、猶不言其發源之始。斯可知矣。

樊引從前後、自勒行衆、沿嶺而（041020）下。三日至地、達觀貨羅諸故都邑。山行八百、路極艱險、寒風切骨、到於活國。中途所經、皆屬北狄。而此王者、突厥之胤、統管諸胡、總御鐵門以南諸小國也。

自此境東、方入葱嶺。嶺據瞻部洲中、南接雪山、北至熱海、東漸烏鐵、西極波斯。縱廣結固、各數千里。冬夏積雪、水巖崖險。過半已下、多出山葱。故因名焉。昔人云、葱嶺停雪。卽雪山也。今親目驗、則知其非。雪山乃居葱嶺已南、東西亘

411	410	409	408	407	406	405	404	403	402	401	400	399	398	397	396	395	394	393	392	391	390	389	388	387																																													
「邪」、	大正は「耶」	に作る。	「徙」、	原文は「從」	に作る。	大正により改める。	「潜」、	原文は「階」	に作る。	大正により改める。	「其」、	原文は「須」	に作る。	大正により改める。	「餘」、	大正は「餘里」	に作る。	三本・宮本は「餘」	に作る。	「暝」、	原文は「宣」	に作る。	大正は「冥」	に作る。	三本により改める。																																												
「鬚」、	原文は「頰」	に作る。	大正により改める。	「肩」、	原文は「肩」	に作る。	大正により改める。	「曲」、	原文は「由」	に作る。	大正により改める。	「象」、	原文は「由」	に作る。	大正により改める。	「晚方」、	原文は「脱分」	に作る。	大正により改める。	「汎漲」、	原文は「汎張」	に作る。	大正により改める。	「恨」、	原文は「恨」	に作る。	大正により改める。	「沮渠」、	原文は「涅般」	に作る。	大正により改める。	「推」、	原文は「推」	に作る。	大正により改める。	「主」、	原文は「至」	に作る。	大正により改める。	「沮」、	原文は「涅」	に作る。	大正により改める。	「遁」、	原文は「道」	に作る。	大正により改める。	「小」、	大正は「大」	に作る。	「曾遊」、	原文は「僧極」	に作る。	大正により改める。	「封」、	原文は「對」	に作る。	大正により改める。	「表」、	原文は「難説」	大正により補う。	「達」、	原文は「達」	に作る。	大正により改める。	「遁」、	原文は「道」	に作る。	大正により改める。

海、南至平野、北達叢山、方名葱嶺。³⁶⁹

又東山行、經於十國、二千餘里、至達摩悉鐵帝國。境在山間。東西千六百里。

南北極廣、不踰四五里許。臨縛芻河。³⁷⁰從南而來、不測其本。僧寺十餘。有一石像。

上施金銅圓蓋。人有旋遶、蓋亦隨轉。豈由機巧。莫測其然。

又東山行、近有千里、達商彌國。東至大川、廣千餘里、南北百餘里、絕無人住。

川有龍池。³⁷¹東西三百、南北五十。其池正在大葱嶺內。瞻部洲中最高地也。何以明

之。池出二河。其西流者、至達摩悉鐵國、與縛芻河合。自此已西、水皆西流。其

東流者、至佉沙西界、與徙多河合。自此已東、水皆東流。故分二河、各注兩海。

故知高也。池出大鳥卵如升許。案條支國大卵如甕、豈非斯邪。³⁸⁷

又東五百、至竭盤陀國。北背徙多河。即經所謂悉陀河也。東又鹽澤、潛於地中、

涌於積石、爲東夏河矣。³⁹⁰其國崇信佛法。城之東南三百餘里、大崖兩室。各一羅

漢。現入減定、七百餘年。〈04-021〉鬚髮漸長、左近諸僧、年別爲剃。

又東千餘、方出葱嶺。至烏鐵國。城臨徙多。西有大山、崖自崩墜。中有僧焉。

瞑目而坐。形甚奇偉。鬚髮下垂、至於肩面。問其委曲、乃迦葉佛時人矣。近重崩

崖、沒於山內。

樊至斯國、與象別行、先度雪河。象晚方至、水漸汎漲。不悉山道、尋嶺直下。

牙衝岸樹。象性凶獷、反拔却頓。固即致死。悵悵、所經已越山險、將達平壤、不

果祈願。

東過踈勒、乃至沮渠。可千餘里。同伴五百、皆共推樊、爲大商主、處位中營、

四面防守。且自沮渠一國、素來常鎮、十部大經、各十萬偈。如前所傳。國寶護之、

不許分散。今屬突厥。南有大山。現三羅漢、入滅盡定。

434	433	432	431	430	429	428	427	426	425	424	423	422	421	420	419	418	417	416	415	414	413	412																																																																		
「鞍」、	原文は「案」	に作る。	大正により改める。	「運」、	大正は「連」	に作る。	三本・宮本は「運」に作る。	「許」、	原文は「計」	に作る。	大正により改める。	「閼闐」、	原文は「閼闐」	に作る。	大正により改める。	「通」、	原文は「道」	に作る。	大正により改める。	「住」、	大正は「駐」	に作る。	「從」、	原文は「徙」	に作る。	大正により改める。	「雀銜」、	原文は「崔衛」	に作る。	大正により改める。	「衆」、	原文は「衆色」	に作る。	大正により改める。	「日北」、	原文は「昆」	に作る。	大正により改める。	「映」、	原文は「映（映の異体字）」	に作る。	大正により改める。	「邁」、	原文は「頭」	に作る。	大正により改める。	「遙」、	原文は「遠」	に作る。	大正により改める。	「像」、	大正は「豫」	に作る。	宮本は「像」に作る。	「古」、	原文は「右」	に作る。	大正により改める。	「閑」、	原文は「困」	に作る。	大正により改める。	「特蒙慰」、	原文は「時像」	に作る。	大正により改める。	「以」、	原文は「八」	に作る。	大正により改める。	「引」、	大正は「引入」	に作る。	「奉面」、	大正は「面奉」	に作る。	「戎」、	原文は「戒」	に作る。	大正により改める。	「左」、	原文は「在」	に作る。	大正により改める。	「違」、	原文は「韋」	に作る。	大正により改める。

東行八百、達于遁國。地惟沙壤。寺有百餘。僧徒五千、並小乘學。城西山寺。佛曾遊踐。有大石室。羅漢入定、石門封掩。初契既度葱嶺、先遣侍人齋表、陳露達國化也。下勅流問、令早相見。行達于遁、以象致死。所齋經像、交無運致。又上表請、尋下別勅、令于遁王、給其鞍乘。既奉嚴勅、駝馬相運、至于沙洲。又蒙別勅、計其行程、酬雇價直。

〔翻譯の開始〕

自爾乘傳二十許乘、以貞觀十九年正月二十四日、居于京郊之西。道俗相趨、屯赴闐闐、數十萬衆、如值下生。將欲入都、人物諠擁、取進不前。遂停別館、通夕禁衛。候備遮斷、停住道旁。從故城之西南、至京師朱雀街之都亭驛、二十餘里、列衆禮謁、動不得旋。于時駕幸洛陽。契乃留諸經像、送弘福（04-022）寺。京邑僧衆、競列幢帳、助運莊嚴、四部諠譁、又倍初至。當斯時也、復感瑞雲、現于日北。團圓如蓋。紅白相映、當于像上、顯發輪光。既非遼日、同共嗟仰。從午至晡、像入弘福、方始歇滅。致使京都五日、四民廢業、七衆歸承。當此一時、傾仰之高、終古罕類也。契雖逢榮問、獨守館宇、坐鎮清閑。恐陷物議。故不臨對。及至洛濱、特蒙慰問。并獻諸國異物、以馬駄之。別勅引深宮之內殿、奉面天顏。談釵真俗、無爽帝旨。從卯至酉、不覺時延、迄于閉鼓。上卽事戎旆、問罪遼左。明旦將發、下勅同行。固辭疾苦、兼陳翻譯。不違其請、乃勅京師留守梁國公房玄齡、專知監護、資備所須、一出天府。

初契在印度、聲暢五天、稱述脂那人物爲盛。戒日大王、并菩提寺僧、思聞此國、爲日久矣。但無信使、未可依憑。彼土常傳、瞻部一洲、四王所治。東謂脂那、主

461	460	459	458	457	456	455	454	453	452	451	450	449	448	447	446	445	444	443	442	441	440	439	438	437	436	435																													
〔并刪〕	原文は「弁那」に作る。大正により改	〔開〕	原文は難読。大正により加える。	〔字〕	原文は「横」に作る。大正により改める。	〔模〕	原文は「證辯機」に作る。	〔證〕	大正は「證辯機」に作る。	〔蹟〕	原文は「蹟」に作る。大正により改める。	〔懷〕	原文は「壞」に作る。大正により改める。	〔褊〕	原文は「論」に作る。大正により改める。	〔潤〕	原文は「閨」に作る。大正は「閨」に作る。元本・明本により改める。	〔蹟〕	原文は「蹟」に作る。大正により改める。	〔聖典〕	原文は「曲」に作る。大正により改める。	〔揚〕	原文は「楊」に作る。大正により改める。	〔瞻〕	大正は「瞻」に作る。三本・宮本は「瞻」に作る。	〔搜〕	原文は「掾」に作る。大正により改める。	〔虛〕	原文は「靈」に作る。大正により改める。	〔洛〕	原文は「路」に作る。大正により改める。	〔企〕	原文は「復」に作る。大正により改める。	〔得〕	原文は「復」に作る。大正により改める。	〔而〕	原文は「西」に作る。大正により改める。	〔而〕	大正になし。	〔又〕	原文は「反」に作る。大正により改める。	〔齋〕	原文は「喪」に作る。大正により改める。	〔捨〕	原文は「捨」に作る。大正により改める。	〔猱〕	原文は「猱」に作る。大正により改める。	〔瞻〕	原文は「瞻」に作る。大正により改める。	〔出〕	大正は「從」に作る。大正により改める。	〔專〕	原文は「寺」に作る。大正により改める。	〔梁〕	原文になし。大正により加える。

人王也。西謂波斯、主寶王也。南謂印度、主象王也。北謂獫狁、主馬王也。皆謂四國藉斯以治、即因爲言。奘既安達、恰述符同。戒日及僧、各遣中使、齎諸經寶、遠獻東夏。是則天竺信命、自奘而通、宣述皇猷之所致也。使既而西返。

又勅王玄策等二十餘人、隨往大夏、并贈綾帛千有餘段。王及僧等、數各有差。并就菩提寺僧、召石蜜匠。乃遣匠二人僧八人、俱到東夏。尋勅往越州、就甘蔗造之、皆得成就。先是菩提寺僧三人、送經初至。下（04-023）勅普請、京城設齋、仍於弘福、譯大嚴等經。不久之間、奘信又至。乃勅且停、待到方譯。主上虛心企仰、頻下明勅、令奘速至。但爲事故留連、不早程達。

既見洛宮、深沃虛相、即陳翻譯、搜摺賢明。上曰。法師唐梵具瞻、詞理通敏。將恐徒揚仄陋、終虧聖典。奘曰。昔者二秦之譯、門位三千。雖復翻傳、猶恐後代無聞、懷疑乖信。若不搜舉同奉玄規、豈以偏能妄參朝委。頻又固請、乃蒙降許。帝曰。自法師行後、造弘福寺。其處雖小、禪院虛靜。可爲翻譯。所須人物吏力、並與玄齡商量。務令優給。

既承明命、返述京師。遂召沙門惠明靈潤等、以爲證義。沙門行友玄瓚等、以爲綴緝。沙門智證等、以爲錄文。沙門玄模、以證梵語。沙門玄應、以定字僞。其年五月、創開翻譯。大菩薩藏經二十卷、余爲執筆、并刪綴詞理。其經廣解六度四攝十力四無所畏三十七品諸菩薩行。合十二品、將四百紙。

又復旁翻顯揚聖教論二十卷。智證等、更造錄文。沙門行友、詳義理文句。奘公、於論重加陶練。次又翻大乘對法論一十五卷。沙門玄瓚、筆受。微有餘隙、又出西域傳一十二卷。沙門辯機、親受時事、連紕前後。兼出佛地六門神呪等經。都合八十許卷。

488 487 486 485 484 483 482 481 480 479 478 477 476 475 474 473 472 471 470 469 468 467 466 465 464 463 462

「無所」、大正になし。
「諸」、原文は「法」に作る。大正により改める。
「合」、原文は「舍」に作る。大正により改める。
「造」、大正は「迭」に作る。
「義」、大正になし。
「沙」、原文は「法」に作る。大正により改める。
「域傳」、原文は「城」に作る。大正により改める。
「連」、原文は難読。大正により補う。
「地」、原文は「見」に作る。大正により改める。
「義」、大正は「教」に作る。
「倒寫」、原文は「到象」に作る。大正により改める。
「觀」、原文は「親」に作る。大正は「亂」に作る。三本により改める。
「増」、原文は「憎」に作る。大正により改める。
「金」、大正は「全」に作る。
「思」、原文は「里」に作る。大正により改める。
「布」、原文は難読。大正により補う。
「以」、原文になし。大正により加える。
「出」、大正になし。
「奘」、大正は「于時駕返西京奘」に作る。
「悉」、大正になし。
「夙」、原文は「風」に作る。大正により改める。
「道」、原文は「通」に作る。大正により改める。
「廢」、原文は難読。大正により補う。
「昏」、原文は「民」に作る。大正により改める。
「披」、原文は「彼」に作る。大正により改める。
「又表」、大正は「又重表目」に作る。
「參」、原文は「卷」に作る。大正により改める。

自前代已來，所譯經義，初從梵語倒寫本文，次乃迴之順同此俗，然後華人觀理文句。中間增損，多墮金言。今所翻《041024》傳，都由樊旨、意思獨斷，出語成章。詞人隨寫，即可披翫，尚賢吳魏所譯諸文。但爲西梵所重，貴於文句，鉤瑣聯類，重沓布在，唐文頗居繁複。故使綴工專司此位。所以貫通詞義，加度節之，銓本勒成，祕書出繕寫。

樊乃悉表上，并請序題。尋降手勅曰：法師、夙標高行，早出塵表。泛寶舟而登彼岸，搜妙道而闢法門，弘闡大猷，蕩滌衆累。是以，慈雲欲卷，舒之騰四空，惠日將昏，朗之照八極。舒朗之者，其唯法師乎。朕，學淺心拙，在物猶迷。況佛教幽微，豈敢仰測。請爲經題，非已所聞。其新撰西域傳者，當自披覽。

樊以、弘贊之極勿尚帝王、開化流布自古爲重。又表 伏奉墨勅、猥垂獎喻。祇奉綸言、精守振越。玄樊、業尚空疎、謬參法侶。幸屬九瀛有截四表無虞、憑皇靈以遠征、恃國威而訪道。窮遐冒險、雖勵愚誠、纂異懷荒、寔資朝化。所獲經論、奉勅翻譯、見成卷軸、未有詮序。伏惟、陛下、勸思雲敷、天華景爛、理包繁象、調逸咸英、跨千古以飛聲、掩百王而騰實。竊以、神力無方、非神思不足詮其理、聖教玄遠、非聖藻何以序其源。故乃、冒犯威嚴、敢希題目、宸睇冲邈、不垂矜許、撫躬累息、相顧失圖。玄樊聞、日月麗天、既分暉於戶牖、江河紀地、亦流潤於巖涯。雲和廣樂、不祓響於聾昧、金壁奇珍、豈輶彩於愚瞽。敢緣斯理、重以干祈。伏乞、雷雨曲垂、天文俯照、配〔04-025〕兩儀而同久、與二耀而俱懸。然則、鸞嶺微言、假神筆而弘遠。鸕園奧義、託英詞而宣暢。豈止區區梵衆、獨荷恩榮。亦

514	513	512	511	510	509	508	507	506	505	504	503	502	501	500	499	498	497	496	495	494	493	492	491	490	489
「冊」	「貝」	「堤」	「納」	「域」	「列」		める。	「乃」	る。	改める。	「俯」	「金」	「邈」	「亦」	「古」	「象」	「包」	「叡」	「愚」	「特」	「皇」	る。	「有」	「幸」	
原文は「具」に作る。大正により改める。	原文は「隄」に作る。大正により改める。	原文は「網」に作る。大正により改める。	原文は「納」に作る。大正により改める。	原文は「域」に作る。大正により改める。	原文は「例」に作る。宮本は「列」に作る。			原文は「遂」に作る。			原文は「府」に作る。大正により改める。	原文は「壹」に作る。大正により改める。	原文は「貌」に作る。大正により改める。	原文は「名」に作る。大正により改める。	原文は「右」に作る。大正により改める。	原文は「旁」に作る。大正により改める。	原文は「色」に作る。大正により改める。	原文は「睿」に作る。大正により改める。	原文は「遇」に作る。大正により改める。	原文は「邁」に作る。大正により改める。	原文は「里」に作る。大正により改める。		原文は「布」に作る。大正により改める。	原文は「業」に作る。大正により改める。	

使蠢蠢迷生、方超塵累而已。

表奏之日、勅乃許焉。仍寫新經遠頒国、故一序文通於三藏。其詞曰。蓋聞、二儀有象、顯覆載以含生、四時無形、潛寒暑以化物「云云」。辭多不載。

奘又表謝曰。竊聞、六爻探蹟、局於生滅之場、百物正名、未涉真如之境。猶且遠徵義冊、觀奧不測其神、遐想軒圖、歷選並歸其美。伏惟、皇帝陛下、玉毫降質、金輪御天。廓先王之九州、掩百千之日月、斥列代之區域、納恒沙之法界。遂使、給園精舍、並入堤封、貝葉靈文、咸歸冊府。玄奘往因、振錫聊謁崛山。經途萬里、怕天威如咫尺、匪乘千葉、詣雙林如食頃。搜揚三藏、盡龍宮之所儲、研究一乘、窮鷲嶺之遺旨。並已載於白馬、還獻紫宸、尋蒙下詔、賜使翻譯。玄奘、識乖龍樹、謬忝傳燈之榮、才異馬鳴、深愧寫瓶之敏。所譯經論、紕舛尤多、遂荷天恩、留神構序。文超象繫之表、若聚日之放千光、理括衆妙之門、同惠雲之濡百草。一音演說、億劫罕逢、忽以微生、親承梵響。踊躍歡喜、如聞受記。

表奏之日、尋下勅曰。朕、才謝珪璋、言慚博達。至於內典、尤所未聞。昨製序文、深爲鄙拙。惟恐、穢翰墨於金簡、標瓦礫於珠林。忽得來書、謬承褒贊。循躬省慮、彌益厚顏。善不足稱、空勞致謝。

自爾朝宰英達、咸申擊贊、釋宗弘盛、氣（04-026）接成陰。

皇太子、述上所作三藏聖教序曰。夫顯揚正教、非智無以廣其文、崇闡微言、非賢莫能定其旨「云云」。文廣不可具載。

弘福寺僧、欣奉中興、慶斯榮泰。乃以序文、勒雙玄石、足使萬古退風、景仰天贊。故其表「云云」。下勅許之。今之門首大碑是也。

及西使再返、又勅二十餘人、隨往印度。前來國命、通議中書。勅以異域方

541 540 539 538 537 536 535 534 533 532 531 530 529 528 527 526 525 524 523 522 521 520 519 518 517 516 515

「錫」、原文は「動」に作る。大正により改める。
「千」、原文になし。大正により加える。
「詣」、原文は難読。大正により補う。
「宸」、原文は「震」に作る。大正により改める。
「踊躍」、原文は「涌濯」に作る。大正により改める。
「朕」、原文は「照」に作る。大正により改める。
「達」、原文は「遠」に作る。大正により改める。
「內典」、原文は「典內」に作る。大正により改める。
「恐」、原文になし。大正により加える。
「瓦」、原文は「乞」に作る。大正により改める。
「林」、原文は「桑」に作る。大正により改める。
「循」、原文は「詞」に作る。大正により改める。
「達」、原文になし。大正により加える。
「贊」、大正は「讀」に作る。
「古」、原文は「右」に作る。大正により改める。
「西」、原文になし。大正により加える。
「異域」、原文は「還域」に作る。大正により改める。
「符」、原文になし。大正により加える。
「轉」、原文になし。大正により加える。
「讀」、原文は「談」に作る。大正により改める。
「千」、原文は「十」に作る。大正により改める。
「遣」、原文は「達」に作る。大正により改める。
「晃」、原文は「日光」に作る。大正により改める。
「旨」、大正は「致」に作る。
「本」、原文は「奉」に作る。大正により改める。
「自」、原文になし。大正により加える。
「祖」、原文になし。大正により加える。

言、務取符會、若非伊人、將編聲教。故諸信命、並資於樊。乃爲轉唐言、依彼西梵、文詞輕重、令彼讀者、尊崇東夏。

尋又下勅、令翻老子五千文爲梵言、以遺西域。樊乃召諸黃巾、述其玄奧、領疊詞旨、方爲翻述。道士蔡晃成英等、競引釋論、中百玄意、用通道經。樊曰。佛道兩教、其旨天殊。安用佛言、用通道義。窮覈言疏、本出無從。晃歸情曰。自昔相傳、祖憑佛教、至於三論。晃所師遵、准義幽通。不無同會。故引解也。如僧肇著論、盛引老莊、猶自申明、不相爲怪。佛言似道。何爽綸言。樊曰。佛教初開、深文尚擁、老談玄理、微附佛言。肇論所傳、引爲聯類。豈以喻詞、而成通極。今經論繁富、各有司南。老但五千、論無文解、自餘千卷、多是醫方。至如此土賢明何晏王弼周顒蕭繹顧歡之徒、動數十家、注解老子。何不引用、乃復旁通釋氏、不乃推步逸蹤乎。

既依翻了、將欲封勒、道士成英曰。老經幽邃。非夫序引、何以相通。請爲翻之。樊曰。觀老治身治國之文、文詞具矣。(04-027)叩齒咽液之序、其言鄙陋。將恐西聞異國、有愧鄉邦。英等以事、聞諸宰輔。樊又陳露其情。中書馬周曰。西域有道如李莊不。樊曰。九十六道、並欲超生、師承有滯、致淪諸有。至如順世四大之術、冥初、六諦之宗、東夏所未言也。若翻老序、則恐彼以爲笑林。遂不譯之。當今、正翻瑜伽師地三十餘卷。其論梵本可十萬偈。若度唐文、應出百卷。春秋四十有五。年德俱盛、日吐新文。請益之徒、後進非少。自應別紀。故不叙之。

〔餘説〕
余以闇昧、濫霑斯席。與之對晤、屢展炎涼。聽言觀行、名實相守。精厲晨昏、

566	565	564	563	562	561	560	559	558	557	556	555	554	553	552	551	550	549	548	547	546	545	544	543	542
「次」、	「趾」、	「形」、	「行」、	「任」、	「常」、	「其」、	「据」、	「雷」、	「俱」、	「笑」、	「夏」、	「李」、	改める。	「注」、	「富」、	「成」、	「喻」、	「擁」、	「豈」、	「曰」、	「老」、	「故」、	「教」、	
原文は「歟」に作る。大正により改める。	原文は「趾」に作る。大正により改める。	原文は「趾」に作る。大正により改める。	原文は「趾」に作る。大正により改める。	原文は「任」に作る。衍字とみて改める。	原文は「任」に作る。衍字とみて改める。	原文は「任」に作る。衍字とみて改める。	原文は「任」に作る。衍字とみて改める。	原文は「任」に作る。衍字とみて改める。	原文は「任」に作る。衍字とみて改める。	原文は「任」に作る。衍字とみて改める。	原文は「任」に作る。衍字とみて改める。	原文は「任」に作る。衍字とみて改める。	原文は「任」に作る。衍字とみて改める。	原文は「任」に作る。衍字とみて改める。	原文は「任」に作る。衍字とみて改める。	原文は「任」に作る。衍字とみて改める。	原文は「任」に作る。衍字とみて改める。	原文は「任」に作る。衍字とみて改める。	原文は「任」に作る。衍字とみて改める。	原文は「任」に作る。衍字とみて改める。	原文は「任」に作る。衍字とみて改める。	原文は「任」に作る。衍字とみて改める。	原文は「任」に作る。衍字とみて改める。	原文は「任」に作る。衍字とみて改める。

之意。

宗師舊轍、頗見詞人。堦墮既圓、稍功其蹙。至如梵文天語、元開大夏之鄉、鳥迹方韻、出自神州之俗、具如別傳、曲盡規猷。遂有僥倖時譽、叨臨傳述、逐轉鋪詞、返音列喻、繁略科斷、比事擬倫。語迹雖同、校理誠異。自非明逾前聖、德邁往賢、方能隱括殊方、用通弘致。道安著論、五失易窺、彥琮屬文、八例難涉。斯並古今通叙。豈妄登臨。

若夫九代所傳、見存簡錄。漢魏守本、本固去華。晉宗傳揚、時開義〔舉〕。文質恢恢、諷味餘逸。厥斯以降、輕靡一期、騰實未聞、講悟蓋寡。皆由詞遂情轉、義〕寫情心、共激波瀾、永成通式。充車溢藏法寶住持。得在福流、失在訛競。故勇猛陳請、詞同世華。制本〔04-029〕受行、不惟文綺。至聖殷鑒、深有其由。群籍所傳、滅法故也。卽事可委。況弘識乎。

然而習俗生常、知過難改、雖欲徙轍、終陷前蹤。粵自漢明終于唐運、翻傳梵本、多信譯人、事語易明、義求罕見。厝情獨斷、惟任筆功、縱有覆疎、還遵舊緒。梵僧執葉、相等情乖、音語莫通、是非俱濫。至如三學成典、惟詮行旨、八藏微言、宗開詞義、前翻後出、靡墜風猷、古哲今賢、德殊恒律。豈非方言重阻、臆斷是授、世轉澆波、奄同浮俗。昔聞、淳風雅暢、既在皇唐、綺飾訛雜、寔鍾季葉。不思本實、妄接詞鋒、競掇芻蕘、鄭聲難偃。

原夫大覺希言、絕世持立、八音四辯、演暢無垠。安得凡懷虛參聖慮、用爲標擬、誠非立言。雖復樂說不窮、隨類各解、理開情外、詞逸寶中。固當斧藻標奇、文高金玉、方可聲通天樂、韻過恒致。近者晉宋顏謝之文、世高尚企而無比。況乖於此、安可言乎。必重前蹤、時俗變矣。其中蕪亂、安足涉言。

619	618	617	616	615	614	613	612	611	610	609	608	607	606	605	604	603	602	601	600	599	598	597	596	595	
「不、以下「風暢既在皇后鋒飾訛新寔鍾季葉	「寔鍾」、原文は「寔種」に作る。大正により改める。	「雜」、原文は「新」に作る。大正により改める。	「飾」、原文は「錦」に作る。大正により改める。	「聞」、原文は「間」に作る。大正により改める。	「雅」、原文は「邪」に作る。大正により改める。	「授」、原文・三本・宮本は「投」に作る。大正により改める。	「德」、原文は「聽」に作る。大正により改める。	「藏」、原文は「籍」に作る。大正により改める。	「惟」、大正は「唯」に作る。	改める。	「語」、原文・宮本は「悟」に作る。大正により改める。	「粵」、原文は「奥」に作る。大正により改める。	「徒」、原文は「徒」に作る。大正により改める。	「識」、原文は「識」に作る。大正により改める。	「滅」、原文は「誠」に作る。大正により改める。	「所」、原文は「何」に作る。大正により改める。	「勇」、原文は「勇々」に作る。衍字とみて改める。	「法」、原文は「法」に作る。大正により改める。	「式」、原文は「戊」に作る。大正により改める。	「波」、原文は「彼」に作る。大正により改める。	以下三字、原文になし。	「傳」、原文は「傳傳」に作る。衍字とみて改める。	「代」、原文は「代」に作る。大正により改める。	「登」、原文は「登登」に作る。衍字とみて改める。	「屬」、原文は「屬」に作る。大正により改める。

往者西涼法識、世號通人、後奉童壽、時稱僧傑。善披文意、妙顯經心、會達言方、風骨流便、弘衍於世、不虧傳述。⁶³³宋有開士惠嚴寶雲。世係賢明、勃興前作、傳度廣部、聯輝絕蹤。將非面奉華胥、親承詰訓、得使聲流千載、故其然矣。⁶³⁴餘則事義相傳、足開神府。寧得如瓶瀉水、不妄叨流。⁶³⁵薄乳之喻、復存於今日矣。⁶³⁶世有契公。獨高聯類。往還振動、備盡（04-030）⁶³⁷觀方、百有餘國、群臣謁敬。言義接對、不待譯人、披析幽旨、華戎胥悅。故弘福之譯、不屑古人、執本陳勘、頻開前失。

既闕全乖、未遑釐正。輒略陳此。失復何言。

續高僧傳卷第四

645 644 643 642 641 640 639 638 637 636 635 634 633 632 631 630 629 628 627 626 625 624 623 622 621 620

不」の一五字あり。誤写とみて除く。
「覺」、原文は「學」に作る。大正により改める。
「持」、大正は「特」に作る。
「辯」、原文は「辨」に作る。大正により改める。
「垠」、原文は「恨」に作る。大正により改める。
「詞」、原文は「調」に作る。大正により改める。
「寶」、原文は難読。大正により補う。
「固」、原文は「故」に作る。大正により改める。
「玉」、原文は「王」に作る。大正により改める。
「高」、原文はなし。大正により加える。
「企」、原文は「爾」に作る。大正により改める。
「乖」、原文は「卒」に作る。大正により改める。
「重前」、大正は「踵斯」に作る。
「披」、原文は「披」に作る。大正により改める。
「衍」、原文は「仰」に作る。大正により改める。
「述」、原文は「迷」に作る。大正により改める。
「士」、原文は「土」に作る。大正により改める。
「聯」、原文は「聰」に作る。大正により改める。
「華胥」、原文は「花肯」に作る。大正により改める。
「矣」、大正は「哉」に作る。
「叨」、原文は「勿」に作る。大正により改める。
「於」、大正になし。
「矣」、大正になし。大正は以下「終虧受誦足定澆淳」の八字を加える。
「方」、原文は「分」に作る。大正により改める。
「對」、原文は「對對」に作る。衍字とみて改める。
「弘福之」、大正は「唐朝後」に作る。
「全」、大正は「今」に作る。